

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

和仏法律学校講義録

加古，貞太郎 / 島田，鐵吉 / 松岡，義正

(出版者 / Publisher)

和仏法律學校

(巻 / Volume)

1

(号 / Number)

号外の13

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

1901-08-05

和佛律學校講義錄

第一卷

號外之拾參

戶

籍

法
（至二三八）法學士島田鐵吉

民事訴訟法自八六編至一七章（至一四三）法學士加古貞太郎
民法物權自八六編至一六六（至六九二）法學士松岡義正



0.90

1900

-2-13

ノ債権ノ辨済期ノ前後ニ到來セシフ區別セス質權者ハ常ニ辨済ヲ受ケントコト、
ヲ得而シテ其辨済トシテ受ケタル物ノ上ニ質權ヲ有ス(第三六七條第四項而シ
テ質權者ハ自己ノ債権カ辨済期ニ到レハ其物ヲ競賣シ其代價ニ依リテ辨済ヲ
得ヘキモノナリ)。但モ此辨済外ニ外モ之に付隨する事不附文也。

以上説明セシ所ハ債権質實行方法ノ原則ナリト雖モ質權者ハ前述セシ方法以
外ニ民事訴訟法ニ定ムル執行方法ニ依リテ質權ノ實行ヲ爲スコトヲ得ヘシ(第
三六八條)。此處で所謂执行方法ハ、即ち執行方法ノ原則、即ち辨済方法、
然ラハ民事訴訟法ニ定ムル執行方法トハ如何同法第六百條乃至第六百二條ニ
規定スル轉付命令令ヒ同法第六百十�條ニ規定スル換價方法はナリ此等ノ說
明ハ民事訴訟法ノ講義ニ就キ詳悉スヘシ質權者ハ常ニ辨済ヲ受ケントコト、
ヲ得而シテ其辨済トシテ受ケタル物ノ上ニ質權ヲ有ス(第三六七條第四項而シ
テ質權者ハ自己ノ債権カ辨済期ニ到レハ其物ヲ競賣シ其代價ニ依リテ辨済ヲ
得ヘキモノナリ)。但モ此辨済外ニ外モ之に付隨する事不附文也。

タリ或少數の學說ニ依レハ抵當ハ羅馬ニ於テ創始セラレタルモ古ナリト爲ス
ト雖モ此說ヲ維持ズルニ足ルベキ根據ハ極メテ薄弱ナリト謂ササシテ
而シテ抵當ハ羅馬ニ於テハ後世ニ至リテ認メラレタルモ十分盛ニ行ハルニ
至ラスシテ債權者ハ單口質權ノ設定ヲ希望セシカ如シ是レ決シテ其故ナキニ
非サルチテ如何トナレハ抵當ニ在リテハ質權ヲ設定セシ場合ト異ナリ其目的
物ノ古有ノ移轉ナキヲ以テ債務者ニ取リテハ抵當不動產ノ使用及ヒ收益ノ權
利ヲ失ハヌシテ極メテ便利ナリト雖モ債權者ニ取リテハ擔保トシテ極メテ薄
弱ニシテ且ツ危險ナル權利謂ハナルカラス即チ債務者ハ自由ニ其目的物
ヲ賣却スルコトヲ得ヘケレハナリ是レ羅馬ニ於テ抵當カ擔保トシラ十分其效
用ヲ奏セサリシ所以ニシテ歐米諸國ニ於テモ此不完全ナル狀態ニテ前世紀マ
テ繼續シ我國ニ於テモ維新前ニ於テハ抵當ニ關スル制度極メテ不備ナリシヲ
以テ其功用十分ナラス體テ不動產質ニ行ハレ抵當ハ擔保トシテ用ヒラル
コト極メテ稀ナリキ此ノ如ク抵當ハ物上擔保ノ沿革上最後ニ認メラレ理論上
最モ進歩シタル制度ナルニ拘ラヌ社會ノ實際ニ於テ從來廣々行ハレサリシ所

以ハ他ナシ其弊害ヲ防止スルニ足ルベキ制度具備セサリシカ故ニシテ其制度
トハ何ソア登記制度即チ是ナリ而シテ今日ニ於テハ各國共ニ登記制度殆ト完
全ノ域ニ達シタルヲ以テ債權者ハ其債權ノ擔保タル目的物ヲ占有スルノ勞ヲ
熱ルニ及ハスシテ登記ノ一事ヲ以テ十分ノ擔保ヲ得ルコトト爲リ隨テ不動產
ニ付テハ當事者ノ設定スル物上擔保トシテハ不動產質ハ其跡ヲ絶ツノ有様ニ
シテ抵當權カ債權質ト相並ヒテ最モ盛行ハルニ至レル所以ナリ
動產ニ付テハ抵當ノ弊害ヲ防止シ其缺點ヲ補フベキ方法タル登記制度全ク行
ハレサルヲ以テ動產ノ抵當ハ擔保トシテ實效ヲ奏セサルモノナリ殊ニ進歩シ
タル法律ニ於テハ所謂即時效ヲ認ムルヲ以テ債務者カ其動產ヲ賣却セシモ
當リ若シ讓受人ニシテ善意ナルトキハ抵當權者ハ如何トモ爲スコト能ハナル
ナリ故ニ我新舊民法共ニ抵當ハ不動產ニ限り動產ニ付テハ之ヲ認イサルナリ
尚ホ茲ニ一言附記シテ注意スヘキハ明治二十九年法律第八十二號日本勸業銀
行法第十七條第二項及ヒ同年法律第八十三號農工銀行法第九條第二項ニ於テ
不動產ヲ抵當ト爲ス云云ト規定セルモ是レ從來ノ用例ヲ製ヒシモノシシテ

保ト爲ストノ意義ニ外ナラスシテ動産ノ抵當ヲ認メタルニ非サルナリ。夫謂舊民法ハ歐洲諸國ノ立法例ニ倣ヒ法律上ノ抵當ヲ認メ債權擔保編第二百四條ニ於テ「左ノ抵當ハ總テノ要約ニ關セヌ當然成立スト」規定シ即チ「婦カ其夫ニ對シテ有スルコト有ル可キ總債權ノ爲メ婚姻ノ日現ニ夫ニ屬スルト日後之ニ屬ス可キトヲ問ハス其夫ノ總不動產ニ付キ婦ノ有スル抵當但夫ノ未成年タルトキモ亦同シ(二)未成年者及ヒ禁治產者カ其後見人ニ對シテ有スル總債權ノ爲メ現在ニ屬スルト將來ニ得ルトヲ問ハス後見人ノ總不動產ニ付キ有スル抵當(三)國府縣市町村及ヒ公設所カ行政法ノ定メタル限度下條件トニ從ヒ會計吏員ノ管理ノ爲メ其不動產ニ付キ有スル抵當四債權擔保編第百八十一條及ヒ第八十四條ニ從ヒテ變性シタル先取特權ヨリ生スル抵當ノ法律上ノ抵當ヲ認メタリシモ新民法ニ於テハ法律上ノ抵當ハ總テ之ヲ認メス蓋シ舊民法カ第三ノ法律上ノ抵當トシテ規定シタル國ノ會計吏員ニ關スル抵當權ニ付キ現行法ヲ按スルニ明治二十二年四月三十日勅令第六十號會計規則第百三條乃至第一百五條ニ規定セリト雖モ是レ唯身元保證金トシフ一定ノ金額ヲ納メシムル

ア原則トシ唯土地ヲ以テ之ニ代フルコトヲ許スノミ府縣制郡制市制ニ據エテ府縣郡市ノ收入役ハ身元保證金ヲ納ムヘキコトヲ規定セバモ其果シニ土地又以テ之ニ代フルコトヲ得ルヤ否キハ明カナラス之ヲ要スルニ我現行法ハ佛國ノ如ク國其他ノ公ノ法人カ收入官吏ノ身元保證トシテ當然其不動產ニ付キ抵當權ヲ有スルモノトスルノ制ヲ採ラス又將來ニ於テモ此制ヲ採用スルコトノルヘキヤ否ヤヲ知ラス且ツ假ニ將來此制ヲ採用スルモノトスルモ是レ自ラ行政法ノ定ムル所ニ依ルヘキモノニシテ敢テ之ヲ民法中ニ掲クルコトヲ要セス又第四ノ先取特權ヨリ變性スル抵當權ハ新民法ニ於テ之ヲ認メナルカ故ニ是レ亦茲ニ掲クルコトヲ得ス餘之所ハ第一及ヒ第二ノ妻未成年者禁治產者カ矣又ハ後見人ノ不動產上ニ有スル抵當權ノミナリ是レ西洋諸國ニ於テ多ク行ハル所ナリト雖モ又之ニ異ナル例モアリ和蘭伊太利白耳義等ノ如キハ此抵當ノ目的タル不動產ヲ限定シ白耳義民法草案ノ如キハ殆ド之ヲ以テ契約上ノ抵當トシ尙ホ此外單ニ裁判所ニ於テ必要ト認ムル場合ニ限リ相當ノ擔保ヲ供セシムルモノモ亦専カラズ而シテ新民法ニ於テハ専ロ後者ノ主義ニ左袒シ第八

百三條及ヒ第九百三十三條ニ於テ夫又ハ後見人ヲシテ相當ノ擔保ヲ供セシム
ルコトヲ得ルモノト爲セリ抑モ法律上ノ抵當ニ於テ若シ其財產ヲ限定セサル
トキハ夫又ハ後見人ノ負擔重キニ遇キヲ顔ル時ニ失ヌル也ノゾリ且ツ舊民法
ノ如キ主義ヲ採ルトキハ不動產ノ權利移轉ヲ濫雜ナラシム公益上亦弊害有シ
トセス現ニ佛國ニ於テハ此弊害ヲ矯メンカ爲メ妻ヲシテ其抵當ヲ譲渡シ又ハ
之ヲ拋棄スルコトヲ得セシム而シテ此法律上ノ擔保ヲ抵當トシ之ヲ不動產ニ
限リシニ至リテハ益々立法ノ非ナルヲ見ル宜シク之ヲ改メ不動產外ノ財產ヲ
擔保ニ供スルヲ得ルモノトスヘシ然ラザレハ後見人カ財產ヲ有スルニ拘ラズ
無能力者ハ全ク無擔保ト爲ルカ或ハ適任ノ人モ單ニ不動產ヲ有セサルカ爲ス
ニ後見人タルコトヲ得タルニ至ルヘタレバナリ是レ新民法カ總ナ法律上ノ抵
當ヲ認メサル所以ナリノ底本入賞典、新民法典ニ當其小題名ニ載セ
新民法ニ於テハ舊民法ノ如ク抵當ノ種別トシ大特ニ遺言上ノ抵當ナルモ既
テ明規セスト雖モ之ヲ掲ケサルハ決シテ遺言上ノ抵當ナシト爲スノ意ニ非ス
シテ唯特別ノ明文ヲ要セシテ當然存シ得ベキモノナシバナリ蓋シ物權ハ當

事者ノ意思ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得ルハ第百七十六條ノ明規スル所エシ
テ而シテ當事者ノ意思ハ或ハ契約ヲ以テ或ハ遺言ヲ以テ之ヲ表示シ得ルハ敢
テ疑フ容レナル所ナルカ故ニ苟モ反對人明文ナク又行爲ノ性質カ遺言ヲ容レ
ナル場合ニ非ナル限ハ當事者ノ意思ハ遺言ヲ以テモ之ヲ表示スルコトヲ得ヘ
キハ専ニ言フア堵タナルモノナリナリ而シテ抵當權ノ設定ハ質權ノ場合ト
異ナリ其目的物タル不動產ノ占有ヲ移轉スルコトヲ必要トセサルヲ以テ當事
者一方ノ意思表示タル遺言ニ因リテモ之ヲ設定スルコトヲ得ヘキコト疑フ容
ナル所ナリトス又舊民法債權擔保編第二百十二條ニハ「抵當ハ遺贈ノ擔保ノ
爲ス又ハ第三者ノ債務ハ擔保ノ爲メニシテミ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得」
ルモノト明言シ其裏面ニ於テ抵當ハ自己ノ債務ノ爲メニ遺言ヲ以テ之ヲ設定
スルコトヲ得ナルモノトスルノ意ヲ表セリ今其理由ヲ繰ヌルニ死亡者ニ對ス
ル債權ハ其死亡ノ時ニ確定スルモノニシテ死亡ノ後ニ效力ヲ生スヘキ遺言ヲ
以テ之ヲ變更スルコトヲ得ナルヲ以テナリト云フニ在レトモ苟モ新ニ遺贈ヲ
爲シテ之ヲ擔保スルニ抵當ス以テ端ル前例を得ル以上ハ單ニ抵當スミテ遺贈

スルコトヲ得ストヌメノ理ナカ放ニ新民法ハ舊民法ノ主義ヲ採用セナルナ
夫モニテ其義大ニシテ甚シ樹セキモ以テ十モ之夫モニテ甚シ樹セ
ルヨリ、第一節、總則、第一、抵當權ノ定義、第二、抵當權ハ自占ノ時權也
第一、抵當權ト、債務者又ハ第三者カ占有ヲ移ナスムヲ債務ノ擔保ニ供ジタル不動
產ニ付キ他ノ債權者ニ先チテ拂濟ヲ受タル權利ナリ第三六九條第一項是ニ由
ヲ之ヲ觀ヒバ抵當權ハ擔保權ナリ即テ債權者ハ債務者ヨリ任意ノ拂濟ヲ得
ナレハ抵當權ノ目的物タル不動產ヲ賣却シ依リテ以テ拂濟ヲ受タルコトヲ得
ルモノナリ抵當權ハ物上擔保ナリ隨テ優先權ト追及權トヲ生ス而シテ其威先
人順序ハ既ニ先取特權、質權ヲ説明スルニ當リ略述セシ所ナリ尙ホ本章ノ説明
ノ進ムニ從ビ之ヲ詳悉スルコトヲ得ヘシ、次文セキ又詳説シ特權の讓言マ等
抵當權ハ其定義ニ依リテ明カナルカ如ク其目的物ノ占有ヲ移スコトヲ要セナ
ルナリ是レ不動產質ト異ナル抵當權ノ特質ニシテ此特質ハ擔保トシテ不動產

質ニ優ル斯以ナリ即テ抵當權設定者ハ抵當權ヲ設定セシモ拘ラズ其不動產ニ
骨ヲ使用、收益ノ権利ヲ失ム又抵當權者ニ古有ツ爲スノ煩勞ヲ自ラスルヲ要
セス單ニ登記ヲ事ヲ以テ十分確實ナルガ擔保ヲ得ヘシ隨テ登記制度完備セシ
今日ニ於テハ不動產質ハ漸ク之ヲ設定タルヨリ下稀ニシテ抵當權及セ債權質カ
物上擔保トシテ最モ盛ニ有ハカルニ至リテ且當セキ時時セキヘ骨筋ナリ
第二、抵當權ノ目的然リイニシテ其目的以テ其目的セキ時時セキヘ骨筋ナリ
抵當權ノ目的ハ其定義ヲ示ス如ク不動產法限ルモノナリ蓋シ動產ト轉換期リ
ナク其所在一定ニナルモノナリ不動產ニ於ケル登記制度ヲ如キ確實ナル公
示方法ヲ設クルコト能ハス而シテ公示方法ナクシテ第三者ニ對抗シ得ルモノ
ニセハ其弊害測ルヘカラズ然リ下雖ニ權利ヲ移轉スルト共ニ追及ノ效力ナキ
モノトセハ殆ト擔保ヲ效用ヲ奏セサルナリ故ニ第三者ヲ害セシムテ擔保ノ效
用ヲ爲ナシメント欲セハ必ス占有之法律フモノト爲スノ外ナシ故ニ動產質
ハ之ヲ認ムルト雖ニ動產抵當權之ヲ認ムナルナリ外國ニ於クハ動產セレハ動
產抵當權認ムル例ナキニ非誠下雖是レ多年之慣習其他諸般事項を相參連

ニ於テノ民法實施前無於テガ法律上動産ヲ抵當ヲ認メタルニ非ナヨルニ民法實施後ハ斷然之ヲ認メヌ唯一ノ例外ニ船舶ハ抵當是才々商法第六百八十六條第一項ハ規定シテ登記タタル船舶ハ之ヲ以テ抵當權之目的ト爲ハロ許得セリ即チ船舶ハ動産中ニモモ最易移動之物也動產ナリ随テ抵當權之目的ハ不動產ニ限リトテ原則ニ例外又爲船モノナリ然リト雖モ船舶ハ他ノ動產ト異ナリ登記ヲ爲スヲ以テ之ヲ抵當權ノ目的ト爲スモ敢テ弊害生ルサルヘキナラム公抵當權ハ有體物上ニ有ハカル物權ナリ於無形體ナル權利ハ抵當權ノ目的ト爲スヨエラ得ツルカ如レ然リト雖モ有體物ヲ以テ其目的ト爲スト云フモ其實ハ有體物ノ所有權ヲ以テ其目的ト爲スト看ルモト正當ナリ如何トナレハ債務者カ任意ニ其債務ヲ辨済セマハ抵當權ノ目的物ヲ賣却セマ其代價ハ依リテ辨済セマ受タルカシヲ得ベシ而シテ抵當權ヲ賣却タルハ通俗ノ慣用語也過キエシテ學理上ハ抵當權ノ目的物ノ所有權ヲ賣却タルモ之ナリト解セサルヘカラテレハナリ故ニ所有權以外之物權ニシテ獨立ニ價格ヲ有シ且ツ獨立シテ處分シ

得モノノナレハ之ヲ以テ抵當權ノ目的ト爲ニシトテ得ベシ即ち地上權及ニ承
小作權是ナリ第三六九條第二項其他ノ物權其性質上抵當權ノ目的タモ不
ヲ得タルモノナリ即チ地役權ヘ要段地ヨリ分離シ才他ノ權利ノ目的ト爲ニシ
テヲ得タルハ第二百八十一條第二項ノ明規スル所ニシテ留置權及ニ先取特權
ニ値權ノ性質ニ依リ法律ニ當然附セシタル權利オレハ之ヲ留シテ以テ他
人債權ニ抵當權ヘ爲ヨシトテ得タル大抵而シテ質權及ニ抵當權モ留シテアリ理論
上之ヲ以テ抵當權ノ目的ト爲ニコトヲ得少然ニ非スルノ質權既當又ニ抵當
權ノ抵當ヘ之ヲ認メ得ヘド雖モ新民法ニ於之ニ第三百七十五條ニ於テ抵當
權若ニ其抵當權ヘ以テ他ノ債權ニ擔保ト爲ニロモノ得ト規定シタガラ以テ甲
ノ債權ニ擔保タル抵當權ハ直アリ之ヲ乙ノ債權ニ擔保ニ移スコトヲ得ガノ便
宜方法アリ而シテ第三百六十六條ニ於テ不動產質ニ抵當權ノ規定ヲ準用ス
ト規定セシカ故ニ不動產質ノ場合ニ於ニ並亦此便宜方法ニ依リ甲債權ノ擔保
タル不動產質ハ直チニ之ヲ乙債權ニ擔保ニ移スコトヲ得キ以テ質權既當

要スルニ抵當權ノ目的ニ所有權地上權及ヒ永小作權又三種別リト大々
 抵當財產ノ滅失又ハ毀損ノ場合ニ抵當財產ノ滅失又ハ毀損ガ抵當權ノ實質ニ
 如何ナル影響ヲ及ホスヘキヤニ關シテル其滅失又ハ毀損カ由ツテ生シタル原因
 因ツ區別シテ研究をサルヘカラズニ付モ本體實質ヘ則當權ノ實質ニ
 抵當財產ノ滅失又ハ毀損カ不可抗力ニ因ル場合ニ於ケル其損失ム債權者ニ歸
 スヘキモノトス蓋シ抵當權モ亦一ノ物權ナリ隨テ其目的物カ所有者ノ過失ナ
 タシテ滅失毀損シタル場合ニ於ケル所有者カ其所有權ノ全部又ハ一部ヲ失フ
 ト等シク抵當權者モ亦抵當權ノ全部又ハ一部ヲ失フハ固ヨリ當然ノヨトタリ
 此場合ニ於ケル若シ所有者ハ既ニ其所有權ヲ失ヒタルカ上ニ尚ホ抵當權者ニ新
 抵當ヲ供スヘキモノトセハ抵當權者ノ爲メニハ甚タ利益ナリト要セ所有者ニ
 取リテハ實ニ不幸ニ不辛ヲ重ヌル歟アリ舊民法債權擔保編第二百一條第一
 項ニ於テ「意外若クハ不可抗ノ原因又ハ第三者ノ所爲ニ出テタル抵當財產ノ
 滅失滅少又ハ毀損ハ債務者ノ損失タリ」下明規ヌト雖モ是レ反對ノ規定ナケレ
 ハ當然此ノ如クナムヘキ所ニシテ之カ爲美ニ特ニ明文ア置ケル必要ナキヲ以

テ新民法ニ於テハ此ノ如キ條文ヲ設ケタルナリ尙ホ此場合ニ於ケモ抵當權者
 ハ其目的物ノ滅失又ハ毀損ニ因リテ債務者カ受クヘキ金錢其他ノ物ニ對シア
 モ抵當權ヲ行使スルコトヲ得ハ第三百七十二條ニ於テ先取特權ノ場合ニ規定
 セラレタル第三百四條ヲ準用スルニ依リテ明カナリ
 抵當財產ノ滅失又ハ毀損カ債務者ノ故意又ハ過失ニ因ル場合ニ付テハ舊民法
 ハ債權擔保編第二百一條第二項ニヒ第三項ニ於テ抵當財產カ債務者ノ所
 為ニ因リ又ハ保持ヲ爲ササルニ因リテ滅失又ハ毀損ヲ受ケ之カ爲メ債務者ノ
 擔保カ不十分ト爲リタルトキハ債務者ハ抵當ノ補充ヲ與フル責ニ任ス此補充
 フ與フルコト能ハナル場合ニ於テハ債務者ハ擔保ノ不十分ト爲リタル限度ニ
 應シ滿期前ト雖モ債務ヲ辨済スル責ニ任ス」
 第十七條第二號ニ依ル期限ノ利益喪失ナル制裁ヲ免レテ單ニ抵當ヲ補充スルヲ
 以テ足レリトセルノミカラス其擔保ノ不十分ト爲ラサル場合ニ於テハ之ヲ補
 充スルコトヲ要セアルモノレバ債務者カ補充ノ抵當ヲ與フルコト能ハナ
 ル場合ニ於テハ單ニ擔保ノ不十分ナム限度ニ應シテ債務ノ辨済ヲ爲スヲ以テ

足レリト爲スト雖モ是レ不當ナムヲ以テ新民法ハ此ノ如キ規定ヲ削除スルヲ
トト爲セリ今其理由ヲ按スルニ抵當權ハ物權ナリ一旦之ヲ設定シタルトキハ
債務者其他抵當權設定者ノ所有權が最早完全ナルモノニ非ス物が所有者ノ權
利ノ目的タルト同時被併セテ又抵當權ノ目的ト爲レリ然ルニ所有者一方ノ過
失ニ因リ之ヲ滅失毀損シタル場合ニ於テ唯代物ヲ供スレバ可カヌトシ甚シキ
ニ至リテハ擔保人十分ナルヲ口實トシテ之カ補充ヲモ拒ムコトヲ許スルカ如キ
ハ不當ノ最モ甚シキモト謂ハナルヘカラス今ハ十分ノ擔保カルモ後ニ至リ
テ天災地變人爲メニ或ハ全タ其物ヲ失ヒ或ハ著シク其價格ヲ失フコトナシト
セナルヘシ債權者ニ與フルニ代抵當ヲ要求スルノ權ヲ以テスレハ稍々此點ヲ
補フニ似タリト雖モ抵當權ノ目的ハ何物ニテモ可ナルニ非ス且ツ假ニ代物ヲ
許ストルモ尙ホ其代抵當人擔當カルキ否ヤニ付キ爭議ヲ惹起スルノ虞多カ
ルヘキヲ以テ此主義ヲ採用スルヲ得ス加之債務者カ補充ノ抵當ヲ與フルコト
能ハナル場合ニ於テハ單ニ擔保ノ不十分ナル限度ニ應シテ債務人辨済ヲ爲ス
ヲ以テ足レリト爲スニ至リテハ更ニ不當ノ甚シキモト謂ハナルヘカラス

何トナレバ此ノ如クスル前キ石後日擔保面全ク滅失シ財力若クハ其價格ヲ減
スル場合ニ於テ債權者ニ不利ナムヨミナラヌ債務者ニ過失ナルカ爲ヌニ債權
者ニ一部ノ辨済ヲ強アル得ハコト下ト爲シ且ツ抵當不可分ノ原則ヲ十分ニ行
ハレナラシムルノ奇觀ヲ呈スルニ至ル是レ新民法カ舊民法ノ主義ヲ採用セサ
ル所以ナリ且當此ノ骨本又難解ニ泉木又直義曰御常識ト曰即ち外國風俗
第三回抵當權ノ範圍ハ通商支局總理曰太古ノ財產ノ歸屬不外乎天然產物
抵當權ハ其目的タル不動產三附加シテ之ヲ體ヲ成シタル物ニ及フ第三七〇
條例ハ洪水ニ因リテ寄洲附著シテ土地ヲ面積增加シタルカ如キ或ニ土地ニ
竹木ヲ栽植シ建物ニ造作ヲ施シタルカ如キ場合ニ於テ總テ此等ノ增加シタル
物ヲ一體ド看做シテ抵當權ハ之ニ及フモノナリ而シテ此原則ニ對シテ四箇ノ
制限ナリ即チ左よりシミテ又當事者ハ御常識外ニ成自由ナリモ之故ニ外國
(一) 抵當地ノ上ニ有スル建築物ハ西洋風於斯風土般ニ建物ハ土地ト一體ナシ或
モノト看ルヲ例トスト雖モ我國ニ於テハ之ニ反シテ土地ト其上ニ存スル建物ト
ハ別物ノ不動產也如外看此當事ナム誤認ナシ土地ヲ以外抵當權ノ目的ト爲シタ

(二) 設定行爲ニ別段ノ定めト舊第三百七十九條ノ規定ハ添附ニ規定キ規定ト異ヌ
テラノ公案規定ニ非タルヲ以テ當事者ハ設定行爲ニ於テ自由ニ之ヲ定ムンコト
ア得ル。勿論カリ。當附ノ事例ニ於テ此ノ事例ニ於テ此ノ事例ニ於テ此ノ事例ニ
(三) 本第四百二十四條ノ規定ニ依テ債權者カ債務者カ債務者ハ行爲ヲ取消スコトア得ル
場合ニ即カ債務者カ債權者ヲ害スベシ止ム。知り次第ノ行爲ニ且抵當權者共其
行爲ニ當時債權者ヲ害スルコトヲ知レ。場合ニシテ予例ハ債務者カ抵當權者
ト通謀シテ他ノ債權者ノ配當ヲ減少シ以テ他ノ債權者ヲ害スルコトヲ知悉セ
ルニ拘ラス。抵當地ニ竹木ヲ栽植シ泉永ヲ新設シ或ハ抵當權ノ目的タル家屋ニ
増築ヲ爲スカ如キ是ナリ。此場合ニ付キ注意セキハ普通ノ詐害行爲ニ於テヤ
法律行爲ノ取消ヲ裁判所ニ請求不チ在リ。雖モ此場合ニ於テ前後干抵當不
動產ニ附加シタ財物各抵當權ノ目的ト爲ヌ。又テ此ノ事はナリ然テサシハ爲財
仙ノ債權者アリ利益アリ地位アリ無無辨清不得也。ル如キ境遇ニ遭遇カル

(四) 實果
抵當權ヲ設定セシ場合ニ於て之質權ヲ設定セシ場合ト異ナリ抵當權設定者ハ抵當不動產ノ使用及ヒ收益ヲ爲ス權利ヲ失ハツルハ既ニ證明セシカ如シ故ニ第三百七十條ノ規定ヲ果實ニモ適用シ抵當權ハ當然抵當不動產人果實ニモ及フモノトセハ抵當權者カ不動產ノ收益ヲ奪フノ結果ヲ生ジ抵當權設定者カ抵當不動產ノ收益ヲ爲ス權利ヲ失ハストノ抵當權ノ特性又害スルニ至ルヘシ是レ第三百七十一條ノ規定不外所以ナリ第三百三十九條ハ此義謂テ然リト雖モ抵當權ハ絕對ニ如何オル場合ニ於キ抵當不動產ノ果實ニ及ハツルエムニ非ヌシテ左ノ場合ニ於キ抵當權ハ抵當不動產ノ果實ニ及フモノトス第三百七一條第一項但書參觀^註合ニ付モ抵當不動產ノ果實ニ及(1)ハ抵當不動產ノ差押アリタムキ又抵當權者又ハ他人債權者カ抵當不動產ノ差押ヲ爲シタルトキハ此時ヨリ以後最早抵當不動產ノ所有者ハ其不動產ヲ處分スルコトヲ得不隨テ不動產ノ一部タル果實ニモ處分スコトナリ又得ナムス以テ此場合ニ於テハ抵當權ハ抵當不動產ノ果實ニ及フモノト爲スハ當然ノ事

理ナリトヨニタルモノハ當實不應有也果實ニ或セシモ其代へ當然ニ連
 通知ナリ故ニ第三取得者ハ此通知ヲ受ケタル後ニ於テハ最早自己ノ爲メニ果
 實ヲ取得スルヨドア得シテ此場合ニ於テモ抵當權ハ抵當不動產ノ果實ニ及
 フモノト爲スコト當然ナリ然リト雖モ第三百八十二條ノ通知アリシニ拘ラズ
 抵當權者カ其權利ヲ實行セザルトキハ第三取得者ヲシテ果實ヲ取得セシメナツ
 ルヲ理ナシ然ラサレハ抵當權ハ依然存續スルニ拘ラス第三取得者ハ收益權ヲ
 異失スルコト爲リ且ツ永遠ニ果實保存ノ義務ヲ負擔セシムルセノニシテ第
 三取得者ヲ酷待スルノ甚シキモノト謂ハサルヘカラス是レ第三百七十一條第
 二項ノ規定アル所以ニシテ第三取得者カ第三百八十一條ノ通知ヲ受ケタルニ
 拘ラス其後一年内ニ抵當不動產ノ差押ナシトキハ抵當權者ハ抵當權實行ノ意
 想ヲ拠棄セシモノト看做スコトヲ得ヘテ融チ第三取得者ハ果實ヲ自己ノ爲
 取ニ得スルヨトヲ得此場合ニ於テハ抵當權ハ抵當不動產ノ果實ニ及ハサルモ

ノト爲ルナリ實錄ヘ登記實錄ノ登記費用ヲ負擔シ本原書又ヘ登記ノ額ヲ
 第四 抵當權ノ設定 訂立ヘシ明示實驗ノ跡並點定本契ナリ其時此ニ古のモ
 抵當權ノ設定原因ハ当事者ノ意思表示ニ限ルモノナリ此點ハ留置權及ヒ先取
 特權ナリナル所ナリ而シテ抵當權ハ質權ノ如ク目的物ノ引渡シヲ要セサルヲ以
 テ必スシモ契約ヲ以テスルヲ要セズ遺言ニ因リテモ之ヲ設定スルヨトヲ得ヘ
 シ是レ質權トモ異ナル所シテ廣々当事者ノ意思表示ニ因リテ設定セラルル
 モノナリト言ヒシ所以モ亦實ニ茲ニ在リ

第二節 抵當權ノ效力
 第一抵當權ノ順位 本原書ヘ登記サセ大清康熙三十四年正月廿九日
 之處人ナリ當事者モ其時此ニ古のモ不動產質權並用不動產抵當權
 第一抵當權ノ順位 本原書ヘ登記サセ大清康熙三十四年正月廿九日
 抵當權ノ順位問題ハ同一ノ不動產ニ付キ二箇以上ノ抵當權設定セラビタシ
 キニ起ルモノニシテ例ヘハ一萬圓ノ價格ヲ有スル不動產ヲ抵當トシテ金七千
 圓ヲ借受ケ次ニ又此不動產ヲ五千圓ノ價格ノ抵當ニ供シタリト無其價額
 一金一萬二千圓ニシテ其抵當不動產ノ價格ハ一萬圓ナルヲ以テ其兩債權者申

孰レ方二千圓ヲ損失スルノ不幸ニ遭遇スルコトナシトモ是レ抵當權ノ順位ナリ即チ其抵當權ノ順位ハ登記ノ前後ニ依ルモノトセリ是レ第百七十七條ノ明規アル以上ハ當然ノ事項ニシテ特ニ第三百七十三條ヲ置クノ必要ナキカ如シト雖モ順位ニ關スル規定ニ付テハ從來何等ノ明規ナク加之先取特權ニ付テハ必シモ常ニ然ラナルヲ以テ茲ニ此規定ヲ置キテ之ヲ不動產質ニ準用シ又或範圍ニ於テ先取特權ニモ準用スルコトト爲セシナリ第三百七十六一條參觀

第二 抵當權ニ依リテ擔保セラルル債權ノ範圍
債權ノ擔保トシテ抵當權設定セラレタルニ當リ其抵當權ニ依リテ擔保セラルル債權ノ範圍ハ其元本及ヒ利息ニ限ルモノナリトス體テ債權ノ擔保トシテ債權設定セラレタル場合ニ於テ其實權ニ依リテ擔保セラルル債權ニ比類シテ其範圍甚タ狹隘ナルヲ見ルヘシ即チ質權ハ單ニ債權ノ元本及ヒ利息ニ止マラス違約金質權實行ノ費用質物保存ノ費用及ヒ債務ノ不履行又ハ質物ノ毀損レタ

ル環狀ニ因リテ生シタル損害ノ賠償ヲ擔保スルモノナルコトハ第三百四十六條ノ規定スル所ナレヘナリ何ガ故ニ兩者此ノ如ク廣狹ノ差異アルナリ是ニ他ナシ質權ノ場合ニ在リテハ質權者ハ質物ヲ占有シ居ルヲ以テ他ノ債權者ハ質權ノ目的物ニ依リテ辨済ヲ受クルコト能ハサルモノナルコトヲ熟知ヌベシ以テ質權者フシテ多クノ辨済ヲ受クルコトヲ得セシムモノ毫モ他ノ債權者フシテ損害ヲ被ラシムルノ處ナシト雖モ抵當ノ場合ニ於テハ抵當權者ハ其目的物ヲ占有セサルヲ以テ唯登記ニ依リテ抵當權ノ存在スルコトヲ知リ得ルニ止マムモノナレハ之ヲ以テ擔保セラルル債權ノ範圍ヲ其元本及ヒ利息ノモニ限リタル所以ナリ而シテ利息モ亦登記シ置カサルヘカラナルコトハ民法ニ於テハ何等ノ明規ナシト雖モ登記法ノ規定ヲ見レハ明白ナル所ナリ(不動產登記法第一一七條參觀)又違約金ノ如キ普通存在セサルヲ以テ常態下スルヲ以テ特ニ之ヲ登記スルニ非ナレハ他ノ債權者ハ何ヲ以テ之ヲ知ルコトヲ得シヤ況ヤ損害ノ賠償ノ如キニ於テヲヤ是レ質權ノ場合ニ比シテ抵當權ニ依リテ擔保セラルル債權ノ範圍狹隘ナル所以ナリ吾等は陳述の其全體を併せ御説教ナシ

利息ハ全部擔保セラルヤ否ヤ若シ利息カ其全部ニ付キ擔保セラルモノト
セハ他ノ債権者ハ意外ノ損失ヲ被ルコトナキヲ保セラルカリ短期ノ貸借ニ於
テハ其利息ハ元本ト共ニ之ヲ支拂フヘキモト爲スロト福ナリト爲サル事無
モ長期ノ貸借ニ於テハ利息ハ毎一年或ハ數年或ハ又毎月之ヲ支拂フヘキ生
ト爲スコト通常ナルヘキヲ以テ數年間ノ利息延滞シ居テヘシト想像セラルハ
極メテ當然ノ事ナリト謂ハナルヘカラス故ニ年利割二歩ノ契約アリシト假
定スルモ尚ホ六七年間ノ利息延滞シ居レハ其利息額ハ殆ド元本ト同一ノ額ニ
上ルヘタ此等ノ債権ニ對シテ恐ク抵當權ヲ行使シ得ルモノシカセバ他ノ債権者
殊ニ第二順位ノ抵當債権者ノ如キハ債権ノ擔保下シテ依頼セシ抵當物ニ付キ
抵當權ヲ行使スルモ毫モ其辨済ヲ受クルヨト能ハナルニ至ルコトアリヘタ意
外ノ損失ヲ被ラシムルモノト謂ハナルヘカラス是レ第三百七十四條ノ規定ア
ル所以ナリ即チ抵當權者乃利息其他ノ定期金ヲ請求スル權利ヲ有スルトキカ
其滿期ト爲リタル最後ノ二年分ニ付ラノミ其抵當權ヲ行使コトヲ得シ是レ極
メテ其當ヲ得タル規定ナリト謂フヘシ然ルニ本條ニ規定セシ利息ノ意義ニ關

シヲ解釋ヲ異ニシ其結果經濟上重大ナル影響ヲ及ホスモノアリ而シテ本問ニ
關スル裁判例モ未タ歸ニ至ラス而シテ實際問題ハ民法實施後頻繁發生
ス是レ蓋ニ世論ノ較ル所ヲ翠ヶ譯學ノ實科ニ供スル所以ナリニ
甲論者ハ曰ク新民法ニ於テ舊民法ニ於ケルカ如ク所謂填補利息及ヒ遲延利
息ノ區別的名稱ヲ採用セシシテ單ニ利息トソミ規定タタルヲ以テ利息ハ當ニ
純然タル利息即チ填補利息ノミ指稱スルニ止マラス性質上損害賠償タル所
謂遲延利息ヲモ包含スルモノナリ而シテ是レ單ニ獨斷解釋ニ非シテ民法ノ
規定自ラ之ヲ證明スル所ナリ即チ民法第四百四十二條第二項、第五百七十五條
第二項第六百六十九條、第七百四條等ニ微シ之ヲ類推セハ金錢ヲ目的トスル債
務ノ不履行ヨリ生スル損害賠償ハ依然利息ト稱シ得キヤ論フ埃タサガカ故
ニ民法第三百七十四條ニ所謂利息トハ辨済期前ノ利息ハ勿論辨済期後ノ利息
ヲモ包含スルモノト解釋スルヲ相當トスト既ニテ當合ハシムト解説
乙論者ハ曰ク甲論者カ列舉引用セシ數條中ニ使用セラレタル利息大ズ語カ所
謂遲延利息ヲ包含キシシタクトヨリ何人モ疑惑ヲ挿ム者ナカルヘシト雖モ民

法カ使用シタル利息ナル語ハ必スシモ常ニ遅延利息ヲ包含スルモノニ非ス民法第五百九十九條等ノ利息ノ如キ明カニ契約上ノ利息ヲミヲ指稱スルモノナリ果シテ然ラバ新民法ニ於テ利息ナル語ハ遅延利息ヲ包含スル場合アルト同時ニ亦然ラル場合ノ存スルモノト謂フヘシ故ニ利息中遅延利息ヲ包含スルモノナリヤ否ヤハ各法條自體ニ付テ判定スヘキモノナリ而シテ第三百七十四條ニ所謂利息ハ決シテ遅延利息ヲ包含セサルコトハ同條ノ解釋上明白争フヘカラナルモノナリ民法第三百七十四條ハ規定シテ曰ク抵當權者カ利息其他ノ定期金ヲ請求スル權利ヲ有スルトキイ其満期ト爲リタル最後ノ二年分ニ付テノミ其抵當權ヲ行フコトヲ得但其以前ノ定期金ニ付テモ満期後特別ノ登記ヲ爲シタルトキヘ其登記ノ時ヨリ之ヲ行フコトヲ妨クシト故ニ抵當權ニ依リテ當然擔保セラルヘキ元本以外ノ債權ノ範圍ハ利息其他ノ定期金ノミナリ即チ定期金タル利息ヒ非ナレハ抵當權ニ依リテ當然擔保セラルヘキモノニ非サルコトニ利息其他ノ定期金ヲ云云トアルカト及ヒ但書虫其以前ノ定期金ニ付テモ云云トアルニ依リテ明白ニシオ而シテ遅延利息カ定期金ニ非サルコトハ説明ヲ

三必要ナル豫定費用賠償ノ請求ヲ擴張シテ該請求ノ執行保全ヲ爲ス三事ハ法律ノ禁セサル所ナリ假差押申請却下ノ場合ニ於テノ借權者も當然假差押訴訟費用ヲ負擔スヘキモノナリ是ニ次ニ又眞理實業社員報酬支給規則第十六(二)再裁判所ハ假差押申請ニ付キロ頭辯論ヲ命シタルトキハ終局判決ヲ以テ裁判終了(4)當事者双方ヲ辯論期日ニ出頭シ且ツ本末又第一審裁判所カ爲シタル裁判ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得第七百四十九條第三項ニ規定シタル期間ニ假差押ノ執行ナキノ故ヲ以テ控訴ノ目的ノ欠缺ト爲ラス第二審裁判所ノ爲シタル判決ニ對シテハ其判決カ第一審裁判所ノ判決並對照所由タルト茲訴審ニ於テ初ニ假差押申請ニ付テ爲シタル時未だ交換シタルト第七六二條上告ヲ爲スコト更得何トナシハ控訴審ノ判決シテハ本審裁判決ノ性質カ上告ノ許否ニ關タル標準ト爲所セナリヒハタシ假差押被告ニ辯論期日ニ出頭セサルト時ハ開庭判決ヲ以テ假差押ヲ命シ又ハ判決ヲ以テ假差押申請ヲ却下ス第百四十六條第二四八條假差押訴訟ニ於テハ實體上ノ権利關係ヲ確定スルヨリ目的ト也ス故ニ第二百四十八條ニ基シ懈怠結果某社ヲ實體上ノ該請求其モソツ確定期

ジカルモトヲ得不唯之ニ代リテ假差押ノ要件ニ付テノ疏明不ミタルコトより爲シノミ假差押原告カ辯論期日ニ出頭セナルトキハ闕席判決ヲ以テ假差押ノ申請ヲ却下ス(第二四六條、第二四七條而シテ闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立テ又民事訴訟法第四百七十四條ノ場合ニ於テ上訴ヲ爲スヨトヲ得假差押申請ニ付テノ判決ハ闕席判決タル否キ拘ラヌ民事訴訟法第四百九十八條無從とテ形式的確定力ヲ生ス隨テ再審ノ目的ト爲ルコトアリ又同一事實ニ基キテ爲シタル假差押申請ニ對シ假差押請求ニ關スル判決ノ實體的確定力ヲ生ス假差押訴訟ニ於テハ實體的請求ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ササバフ以テ此請求ニ付タノ判決ノ實體的確定力ヲ生セザルナ言ヲ俟タソ蘭テ債務者ハ假差押申請ヲ却下セラレタル債権者カ同一事實ニ基キテ更ニ爲シタル假差押申請ニ對シテ再审理ノ抗辯ヲ提出スルコトヲ得但シ債権者が新事實ナ基キテ更ニ假差押ノ申請ヲ爲シ疏明ノ補充ハ新事實ニアラス又債務者カ民事訴訟法第七百四十六條及ヒ第七百四十七條ニ從ヒテ假差押ノ取消ヲ求ムルコトヲ得ハ假差押判決ノ確定力ニ抵觸スル所ナシ判決ノ形式内容及ヒ送达ハ民事訴訟法第二百三

十三條乃至第二百三十七條及ヒ第二百三十九條ノ規定並機ル切假差押訴訟費用ハ民事訴訟法第七十二條以下ノ規定ニ從ヒテ假差押申請ニ付テノ終局判決ニ於テ裁判シ(第二三一條、第二四二條)本案訴訟の裁判ヲ爲ス事ニ之又留保スルコトヲ得ヌ何トナレハ假差押バノ特別ナル訴訟シテ又中間争ニ非ガレハナリ然レトモ假差押被告ハ本案ニ於テ假差押原告ガ全額又ハ一分ノ敗訴ヲ受クヘキ場合ニ於テ反訴トシテ假差押判決ニ於テ負擔ヲ命セラレタム費用賠償義務人免除又ハ既ニ支拂ヒタル費用ノ賠償又請求スルコトヲ得ヘシ
(三) 假差押命令ハ其形式ヲ決定ナムト判決大判及ヒ拘ラヌ假差押ニ因リテ保全セントスル請求ノ原因及ヒ數額(主タル請求附帶ノ請求、訴訟費用)ヲ表示セラルベカラス假差押ノ目的物ヲ表示スルコトノ必要ナキオトハ羅ニ述ヘタル所ナリ(第七四二條獨逸民事訴訟法舊第八〇二條新第九二三條其他)假差押命令ニハ裁判所カ職權ヲ以テ保證ヲ立テタルコト及ヒ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立タルヤア記載シ債務者ニ之ヲ通知スルコトヲ得セシム(第七四一條第三項又

假差押人執行ヲ停止スルヲ得ル者爲メ又執行終タルハ假差押利取消者三ヶ月又得ルカ爲メニ債務者ヨリ供託スルキ金額ヲ記載スル判決第七四三條獨逸民事訴訟法舊第八〇三條新第九二三條此金額ハ裁判所が假差押ニ因リテ保全セントスル請求額主タル請求及ヒ從タル請求並ニ訴訟費用ニ準據シテ之ヲ定メ假差押ノ目的物ノ價額ニ準據シテ之ヲ定ムルモノニ非ス何トガルハ假差押ノ目的物ノ價額ハ假差押命合フ發火ル當時ニテ未タ知ル時ドア等ガルノ更ナラスル金額ノ供託ハ假差押ニ代リテ債權者ノ將來ニ於ケル滿足ヲ擔保スルカ爲メノ方法ナレハナリ隨テ債務者が假差押ノ目的物ノ價額カ假差押ニ因リテ保全セント欲スル請求額ニ達セサル場合ニ於テ前者ノ價額ニ相當スル金額ヲ供託シテ假差押ヲ取消スノ權利ヲ有セス又裁判所ノ定タル金額カ假差押ニ因リテ保全セントスル請求額ヨリ少額ナルトキハ假差押申請ノ一分却下ト爲ル故ニ斯ル金額ノ確定裁判ニ對シテ上訴ヲ爲スヨリ得但シ裁判所ハ當事者ノ合意ナキ以上ハ金額ニ依ル供託ニ非ヌル供託ヲ假差押命合中記載スルコトヲ得ス第743條……全額……蓋シ特定金額石供託ニ依リテ假差押ハ取消又以停止ア

ノモ適當ニ其目的ヲ達スルコトヲ得レハカリ(假差押ノ金錢保付)ハ成功ヲ保全スルコトヲ目的トスルハ前述シタル所ナリ又裁判所ハ該金額ヲ確定スルニ當リテ假差押ニ因リテ保全セントスル請求人一部分ヲ抵當其他ノ方法ニテ擔保セラレタルヤ否ヤヲ調査セサルヘカラス何トナレハ完全ニ擔保セラレタル部分ニ關シテハ假差押ヲ許スベキモノニ非ナルコト幾ニ述ヘタルカ如クナビハナリ債務者及ヒ第三者ハ該金額ヲ供託スルコトヲ得債務者カ供託シタルトキハ債權者ハ其供託ノ結果トシテ假差押ノ停止又ハ取消ニ因リテ假差押ノ目的物ニ對スル權利ト同一ノ權利ヲ有スルニ至ル而シテ供託シタル金額ハ假差押債權者ノ債權金額ハメ擔保ノ用ニ供セラルハ假差押ノ目的物タリシ物件ノ價額ニ於テ擔保ノ用ニ供セラルモノニ非ナルコト屢ニ述ヘタルカ如クナルヲ以テ假差押ノ執行トシテ爲シタル假差押ノ目的物ニ關スル假差押ノ法律上有效ナルヤ否ヤヲ間ハサルナリ民事訴訟法第五百四十九條及ヒ五百六十五條ニ基キテ權利ヲ主張セント欲スル第三者が假差押ノ執行ヲ妨テル者爲メニ假差押命令ニ記載シタル金額石供託シタルトキハ其第三者且債權者トノ關係ニ

於ヲ供託金額カ假差押ノ目的物又ハ其實得金ニ換ハルニ止マリ第三者ガ此金額ニ對シテ有スル權利ヲ失フモノニ非ス債務者ソニモ並金額ヲ供託シタル旨ノ公正證書ヲ執達吏者タゞ其他ノ執行機關ニ提出シテ假差押ノ執行ヲ停止セシムルコトヲ得第七四八條第五五〇條第三號又執行裁判所ヲシテ假差押ノ取消ヲ爲サシムルコトヲ得金額ハ一部ノ供託ハ假差押ノ執行ノ一部ノ停止又ハ取消ヲ許スモノタリ(第七五四條而シテ假差押ノ取消ハ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニシテ(第七四三條第七四五條)…執行シタル假差押ヲ取消ス)

三、第五五〇條第三號第五五一條假差押命令其モノノ取消ニ非ス(第七四五條第二項第七四五條第二項、第七四六條第二項假差押ノ取消トアリ)執行シタル假差押ノ取消トナシ蓋シ假差押命令ノ取消ニハ民事訴訟法第七百四十四條、第七百四十五條及ヒ第七百四十七條ニ基ク手續ヲ經ルコトヲ要スレハナリ債務者ハ債權者ノ承諾アルカ又ハ假差押命令ノ取消アルトキニ於テ其供託シタル金額ノ返付ヲ求ムルコトヲ得其取消判決カ假執行ノ宣言アルニ止マル場合ニ於テモ亦然リ第五五〇條第一號第五五一條第五五〇一條第四號第五一〇條第二項而

シテ假差押命令ヲ取消アリタル場合ニ於テ其裁判所ハ民事訴訟法第五百十條第二項ノ單用トシテ(第七四八條債務者ノ申立ニ因リ取消判決ニ於テ債權者ニ對シ供託シタル金額ノ負責ニ付キ承認ヲ爲スベキ旨ヲ言渡スセトヲ得ヘシ)ヒ假差押裁判所カ假差押命令ニ民事訴訟法第七百四十一號第四項及ヒ第七百四十三條ニ從ヒヲ記載スベキ事項ヲ記載セナガトキハ假差押命令ノ形式カ判決ナルヤ又ハ決定ナルヤニ付テ區別シ前者リ場合ニ於テ上訴若タハ故障ヲ以テ救濟ヲ受ケ追加裁判ヲ申立ツルコトヲ得ヌ第二四二條何トナレム斯ル場合ニ於テハ請求ノ脱落アルニ非スシテ却テ法律上失當ナル假差押命令ノ内容ヲ擴張アルニ止マレハナリ後者ニ場合ニ於テの債務者ハ異議申立ノ方法ニ依リテ救濟ヲ受ケ債權者ハ新ニ完全ナル假差押命令ヲ申請スルコトヲ得ヘシ(第四五五條)裁判ニ關スル手續)陳述、見聞セテ須要、證言等之證據ニ皆可據用

(B)假差押ノ執行財金額債權ヲ爲シニ被告ニ對シ辯論ヲ命シタル判決ハ國家カ其干涉ニ因リテ債權者ノ爲メニ其有シタル債權ニ付キ債權者ノ享有スルキ即時ノ滿足ヲ擔保スルノ宣誓ヲ表彰スルもカナルト同シテ假差押命令ハ開宗

カ其干涉ニ因リノ債権者ノ爲モニ某有スル金錢債権付キ將來半於タル滿足ノ保全ヲ擔保スモ才宣言ヲ表形ス故ニ假差押之執行即チ國家カ其干涉ニ因リテ爲ス金錢債権ノ保全ノ實在的供給ハ金錢債権ノ爲ニスル強制執行ニ適當ス是ヲ以テ我民事訴訟法ハ別段ノ規定ナキ限りハ假差押ノ執行ニ付キ強制執行ニ關スル規定ヲ單用スヘキニトヲ規定セタミ第七四八條而シテ強制執行ノ開始及ヒ其實行差押ニ關スル規定殊ニ民事訴訟法第五百七十條第六百十八條執行ニ關スル異議第四四條第五四五條第五四九條但シ假差押ノ執行ナ第7百五十條第三項ノ場合ヲ除ク外換價タル時オキヲ以テ第三者ハ執行參加訴ニ於テ既ニ爲シタル執行部分ノ取消深申立タルヨトヲ得レトモ停止ノ申立ト適用ノ目的物オキヲ以テ之ヲ爲モコトヲ得ガルヘルヘシ及ヒ執行費用ニ關スル法則第五五四條ハ假差押ノ執行ナ適用ナシタル然レドモ差押目的物ノ換價債権者ニ對スル辯論並ハ配當ニ關スル法則ハ假差押ノ執行ニ適用ナシ蓋シ假差押ハ誠ニ述ベタルカ如ク唯請求執行保全の目的ニ止マレシナカニ又假差押ニ對シ異議ハ申立て爲シタル場合ニ於テ民事訴訟法第五百條及び第五百十

二條ヲ適用スルコトヲ得ス蓋シ假差押ノ執行ノ停止ハ唯民事訴訟法第七百四十三條ニ依リテ爲スコトヲ得ルシミナレハナリ是レ我民事訴訟法第七百四十八條ニ準用ト云ヒテ適用ト云ハサル所以ナリ左ニ假差押ノ執行ニ特定ナル法則ヲ略述スヘシ
(4) 因債務名義及ヒ執行文付與連假差押命令ハ其形式ノ判決ナルト決定ナルトニ拘ラス債務名義ノ一種ナルコトハ疑オキ所ナリ又假差押命令ハ當然債務者及ヒ執行ノ機關ニ對スル強制執行命令ヲ包含ス故ニ假差押命令ハ其形式ノ判決タルト決定タルトニ拘ラス即時ノ執行力ヲ有シ判決ノ形式ナル場合ニ於テ該判決ノ確定又ハ假執行ノ宣言アガロコト要セス又督促手續ニ於ケル支拂命令ト同シク執行文ノ付與アルコトヲ要ス是レ假差押ハ其性質上迅速ニ執行スルコトヲ要スルカ故ナリ唯假差押ノ命令ヲ發シタル後債権者又ハ債務者ニ於テ權利承繼アリタル場合ニ於テ執行文ノ付與アルコトヲ要スルノミ(第七四九條第一項、第五十九條乃至第五二一條第一項面シテ假差押命令ヲ發スル以前ニ既ニ債権者又ハ債務者ニ權利承繼アリタル場合ニ於テ之ニ注意

スルコトナク假差押命令力發セラレタルトキモ亦類推解釋上民事訴訟法第五百四十九條第一項之適用ニ因リテ執行文ノ付與ヲ要スト論結スルヲ正當ト認ム
第一八三條参考)

(b) 假差押ノ執行ヲ許サルコト及ヒ其命令ノ送達ヲ要セサルコト即假差押ノ執行ハ其命令ヲ言渡若クハ申立人ニ之ヲ送達シタル日ヨリ十四日ノ期間ヲ経過シタルトキハ之ヲ爲スコトヲ許サス是レ蓋シ假差押ノ執行ヲ爲スコトハ強制執行ヲ爲スコト同シ債権者ノ行爲ニ委チタルヲ以テ債権者ハ其假差押申請ノ當時ニ於ケルモノト變更シ且ツ既ニ假差押ノ執行ヲ必要ト爲サル状況ノ下ニ於テ假差押ヲ執行スルノ危險ヲ避ケル目的ニ出テタルモノタリ此十四日ノ期間ハ其性質上法定期間タリ故ニ當事者ノ合意ノ外ハ之ヲ伸縮スルコトヲ得ス第一七〇條第一六八條第二項裁判所構成法第一二九條又此期間ハ假差押命令ノ形式カ判決ナルトキハ其言渡ノ日ヨリ決定ナルトキハ債権者ニ職權ヲ以テ送達シタル日ヨリ起算シ第二四五條而シテ假差押命令ノ形式カ法定ナル場合ニ於テ其送達カ債権者ニ適法ニ爲サレサルカ爲メニ假差押ノ執行

ノ效力ニ影響ヲ及ボヌモノニ非ヘ債権者カ適法ナル送達ニ依ラスシテ假差押決定ノ正本ヲ所持シタルトキハ債権者カ自己ニ對スル適法ノ送達ヲ受タルノ權利ヲ抛弃シタルモノト看做シ且ツ該正本受領ノ時期ヲ以テ此法定期間ノ起算點ト爲スラ正常トス蓋シ債務者ハ債権者ニ假差押決定カ送達セラレタルト單ニ該決定ノ正本カ交付セラレタルトニ付キ利害關係ヲ有セサレハナリ
假差押ノ執行ハ此法定期間ヲ徒過シタルトキヤ之ヲ許サルヲ以テ此期間經過後ニ於ケル假差押ノ執行ハ假令債権者カ執行機關ニ對シテ爲シタル假差押ノ執行ヲ求ムルノ申立ヲ該期間經過前ニ在リト雖モ法律上何等ノ效力殊ニ民事訴訟法第七百五十條以下ニ規定シタル效力ヲ有セス故ニ執達吏其他ノ執行機關ハ假差押命令ノ形式カ判決ナルトキハ其正本ニ附記シタル判決言渡ノ宣告ニ依リ(第二三七條又決定ナルトキハ債権者ノ所持スル送達證書ノ原本ニ依リテ前ニ示シタル期間ヲ經過セサルヤ否ヤヲ調査シ其結果徒過シタルモノト認メタルトキハ執行行為ヲ爲スヘキコトヲ拒絕セサルヘカラス又債務者ハ民

事訴訟法第五百四十四條ニ基キテ異議ヲ申立ツルコトヲ得(第五五八條)然レトモ該十四日ノ期間内ニ著手セラレタル執行行爲ヲ續行カ此期間經過後ニ涉ルコトハ敢テ妨ナキ所ナリ何トナレバ法律ハ此期間經過後ニ新ナル執行行爲ノ著手ヲ許ササルニ過キサレハナリ故ニ十四日ノ期間内ニ差押ヘタル動産ヲ民事訴訟法第七百五十條第三項ニ從ヒテ期間後ニ賣却シ債權ニ關スル差押決定後(此決定ニ因リテ債權ニ對スル強制執行ノ開始アルコトヲ爲ル其決定ヲ送達シ不動産ニ關スル假差押命令ヲ登記簿ニ記入スルカ如キハ法律ノ許ス所ニシテ新ニ差押ヲ爲スコトハ法律ノ許ササル所ナリ)。然レバ該期間經過後ニ新ニ差押ノ執行ハ債務者ニ假差押命令ヲ送達スル以前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得判決其他ノ債務名義ニ基ク執行ニ於ケルカ如ク執行前ニ既ニ送達シ又ハ執行ト同時ニ送達スルコトヲ要セ(第七四九條第三項獨逸民事訴訟法第八〇九條第三項、第六七一條是レ畢竟假差押ノ執行ハ迅速ニ爲ササレハ債權者ノ目的ヲ達スルヲ得サルコト多キヲ以テ債務者ノ利益ノ爲メニ斯ル例ヲ設ケタルニ過キス獨逸ノ民事訴訟法ハ其初メ舊民事訴訟法第八百九十三條第三項即チ新

民事訴訟法第九百二十九條第三項ノ如キ即文ヲ設クサリシヲ以テ假差押ノ執行ニ關シテモ亦執行力アル正本ヲ執行前ニ既ニ送達シ又ハ執行ト同時ニ送達スルコトヲ要シタリ(獨逸民事訴訟法舊第八〇八條第六七一條而シテ獨逸民事訴訟法第一百八十二條、第一百八十九條、我民事訴訟法第一百五十三條、第一百五十八條ニ依レル送達ハ民事訴訟法第八百九條第二項ニ規定シタル期間内ニ事實上爲スコト能ハサルカ爲メニ債務者ハ斯ル送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テ送達假差押ノ執行ヲ爲スコトヲ得サルノ結果ヲ生シタリ故ニ千八百八十六年四月三十日ノ法律ヲ以テ民事訴訟法第八百九條第三項上段トシテ「執行ハ債務者ニ對スル假差押命令ノ送達前ト雖モ之ヲ許ス」トノ規定ヲ設ケタリ然レトモ此規定ハ草案ト異ニシテ斯ル場合ニ其適用ヲ限定セシテ廣ク假差押ノ執行ノ開始ハ債權者カ該命令ヲ債務者ニ送達シタル以前ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ル旨ヲ明示シタルヲ以テ假差押ノ執行ニ關スル獨逸民事訴訟法第六百七十一條(我民事訴訟法第五二八條)ノ適用ヲ變更シタリ是ヲ以テ債務者ハ獨逸民事訴訟法第八百三條(我民事訴訟法第七四三條ニ基キテ特定ノ金額ヲ供託シ以テ假差

押ノ執行ヲ避タル權能ヲ事實上奪ハレタリト論結セナルヲ得ス我民事訴訟法ノ解釋トシテモ亦同一ノ論結ヲ爲サツルヘカラス
債權者ハ債務者ニ假差押命令ヲ送達スル以前ニ於テ其執行ヲ爲スコトヲ得ルカ爲メニ民事訴訟法第五百二十八條ノ適用ノ結果タル執行力アル正本ノ送達ヲ爲スヘキ義務ヲ免ルモノト云フヘカラス第七四八條故ニ獨逸民事訴訟法第八百九條第三項下段ニ於テ「送達ヲ執行後一週間ニ爲サス且ツ假差押ノ執行ノ爲メニ前項ニ規定シタル期間ノ經過前ニ爲サツルトキハ執行ノ效力ナシト規定シ以テ債務者ニ對シ爾後送達ヲ爲スヘキ旨ヲ明示シタリ我民事訴訟法ニ於テ斯ル明文ヲ缺クハ立法上ノ缺點タリ

(c) 動產ニ對スル假差押ノ執行 假差押ハ執行ノ保全ノ目的トスルヲ以テ強制執行ト同一ノ方法ニ依リテ執行スルヲ當然トス故ニ動產ニ對スル假差押ノ執行ハ其動產カ有體動產タルト無體動產即チ債權其他ノ財產權タルトニ拘ラス動產ニ對スル強制執行ノ實行ト同シク差押ニ因リテ之ヲ爲ス(五六四條乃至第五七〇條、第五八六條乃至第五九七條、第六〇九條第六一二條、第六一四條乃至第五九九條第五九五條第六百二十五條ニ規定シタル財產權ニ對スル強制執行ニ關シテモ亦假差押裁判所カ執行裁判所トシテ第三債務者ニ對シ支拂ヲ爲スコトヲ禁ム命令ミヲ發シテ之ヲ爲ス第七五〇條第二項及ヒ第三項第五九五條第六百二十五條ニ規定シタル財產權ニ對スル強制執行ニ關シテモ亦假差押裁判所カ執行裁判所ト爲ルコトハガウブ氏ノ是認シタル所ナリ獨逸民事訴訟法ニ於テハ我民事訴訟法第七百五十條第三項ノ如キ明文ナキヲ以テ債權ノ假差押ニ對スハ第三債務者ニ對シ其支拂ヲ債務者ニ爲スコトヲ禁止スル命令ヲ發スルノ外ニ尙ニ債務者ニ對シ其債權ノ處分ヲ禁止スルノ命令ヲ發スルコト債權ニ對スル強制執行ノ實施ト同一ナリ然レトモ我民事訴訟法ニ於テハ單ニ第三債務者ニ對シ其支拂禁止ノ命令ノミヲ發スルコトヲ以テ假差押ノ執行タルニ足ルト認メタルハ強制執行ニ於ケル差押ト假差押ノ執行ニ於ケル差押ト區別シタルカ爲メナルヘシト雖モ立法上其當ヲ得タルモノト云フヘカラス蓋シ債務者ニ對シモ亦其債權處分ノ禁止ヲ命スルコトヲ適當ト爲セハナリハ企圖骨董ニ對スルモ可ト得ム

六二一條、第六二二條、第六二五條然レドモ債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル假差押裁判所カ假差押ノ執行ヲ容易ナラシムルノ便宜上執行裁判所トシテ第三債務者ニ對シ支拂ヲ爲スコトヲ禁ム命令ミヲ發シテ之ヲ爲ス第七五〇條第二項及ヒ第三項第五九五條第六百二十五條ニ規定シタル財產權ニ對スル強制執行ニ關シテモ亦假差押裁判所カ執行裁判所ト爲ルコトハガウブ氏ノ是認シタル所ナリ獨逸民事訴訟法ニ於テハ我民事訴訟法第七百五十條第三項ノ如キ明文ナキヲ以テ債權ノ假差押ニ對スハ第三債務者ニ對シ其支拂ヲ債務者ニ爲スコトヲ禁止スル命令ヲ發スルノ外ニ尙ニ債務者ニ對シ其債權ノ處分ヲ禁止スルノ命令ヲ發スルコト債權ニ對スル強制執行ニ於ケル差押ト假差押ノ執行ニ於ケル差押ト區別シタルカ爲メナルヘシト雖モ立法上其當ヲ得タルモノト云フヘカラス蓋シ債務者ニ對シモ亦其債權處分ノ禁止ヲ命スルコトヲ適當ト爲セハナリハ企圖骨董ニ對スルモ可ト得ム

假差押ノ執行ノ效力ハ金錢債權又ハ金錢債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付
ノ強制執行ヲ保全スルニ止マリ強制執行ノ如ク債權者ニ辨濟ヲ得セシム
モノニ非ス故ニ(1)有體動產及ヒ有價證券ニ關シテハ執達吏カ之ヲ差押フルニ
止マリ債權者ニ満足ヲ供スルカ為メニ之ヲ換價スルコトヲ得ス然レトモ例外
トシテ假差押物ニ著シキ價額ノ減少ヲ生スル恐アルトキ又ハ其時誠ニ付キ不
相應ナル費用ヲ生スヘキトキハ執行裁判所ハ(第七百五十條第二項ニ所謂差押
裁判所ハ茲ニ所謂執行裁判所ニ非ナルコトヲ注意スヘシ債權者又ハ債務者ノ
申立ニ因リ其自由ナル意見ニ從ヒテ執達吏ニ假差押物ヲ競賣シ其賣得金ヲ供
託スヘキ旨ヲ命スルコトヲ得第七五〇條第四項〔……〕第五七〇條以下而シテ
此裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得第七四八條第五五八條又假差押ノ
金錢ニ關シテハ執達吏カ之ヲ供託スルニ止マリ民事訴訟法第五百七十四條ニ
從ヒテ之ヲ債權者ニ引渡スコトヲ得ス其他甲債權者ノ假差押物ヲ乙債權者ノ
爲メニ強制執行ノ實施トシテ差押ヘ且ツ換價スルニ際シ第五六八條第四項甲
債權者ノ受クヘキ配當額ヲ供託シ第六三〇條第三項此配當額ヲ委付スルコト

ア得ス但シ假差押ヲ爲シタル債權者カ爾後強制執行ヲ實施スルニ必要ナル條
件ヲ備フルニ至リタルトキハ假差押物ニ代リタルスル供託額ヲ交付スヘキヤ
當然ナリ(2)債權ニ關シテハ第三債務者ニ對シ其債權者ニ對スル支拂禁止ノ差
押命令ヲ送達スルニ止マリ債權者ノ爲メニ取立命令又ハ轉付命令ヲ發スルコ
トヲ得ス(第六〇〇條其他假差押債權者ハ民法上ノ原則ニ從ヒテ假差押ニ係ル
債權ノ讓渡ヲ攻擊スルコトヲ得ス)間接的・間接的・間接的・間接的・間接的
假差押ノ效力ハ其效力カ強制執行上ノ效力ト爲リ若クハ假差押ノ取消アルマ
テ存續ス假差押ノ效力ハ債務者カ本案ニ付キ敗訴シタルトキハ其敗訴判決カ
執行力ヲ生スルニ因リテ當然強制執行上ノ效力ニ變更シ重複ノ差押ヲ爲
スコトヲ要セス是レ法律上明文ナシト雖モ事物ノ性質ニ適シ又費用勞力ヒ
時間ノ節略ヲ目的トスル民事訴訟法ノ原則ニ遁スル論結ニシテ學者間ニ爭ナ
キ所ナリ但シ假差押ノ效力ヲ條件附ト認メ本案ニ關スル債務者敗訴ノ判決ノ
執行力發生ヲ以テ其條件ノ到來ト認メテ斯ル論結ヲ説明スルハ正當ノ見解ナ
リト認メ難シ蓋シ假差押ノ效力ハ其執行半因チ無條件ニテ發生之條件附強

制執行ノ效力ニ非サレハナリ而シテ假差押ノ效力カ強制執行ノ效力ニ變性スルハ法律ノ力ニ因リ假差押ノ效力ニ強制執行上ノ效力カ聯合スルニ依リテ成ルモノナルヲ以テ第一ノ前提要件トシテ本案ニ關スル債務者敗訴ノ判決カ執行力ヲ發生スル當時ニ於テ既ニ假差押ノ效力ノ成立スルコトヲ要シ強制執行ニ關スル債務名義ノ送達ニ依リテ(第五二八條)債務者カ民事訴訟法第七百四十三條ニ基ク假差押取消ノ權能ヲ喪失スルヲ以テ第二ノ前提要件トシテ斯ル債務名義ノ送達アルコトヲ要ス此二者ノ要件ノ存スル場合ニ於テハ債権者ハ強制執行上ノ債権者トシテノ總テノ權利ヲ有ス故ニ假差押物ヲ競賣シ(第五七二條)但シ第五百七十五條ニ規定シタル期間ハ強制執行上ノ債務名義ノ送達ノ日ヨリ起算スルヤ言ヲ俟タス供託シタル金額ノ交付ヲ求メ又債権ノ取立命令若クハ轉付命令ヲ求ムルコトヲ得第六一三條第六一五條第二項第六一六條第二項假差押ノ效力ハ債権者カ本案ニ付キ敗訴シタルカ為メニ當然取消サルモノニ非ス債務者ハ斯ル判決ニ依リテ假差押ノ取消ヲ求ムルコトヲ得ルノミ(第六七四六條)

(p) 不動產ニ對スル假差押ノ執行 不動產ニ對スル假差押執行ノ方法ハ強制競賣ト強制管理トノ二者アリ(第六四〇條)前者ハ執行ノ保全ヲ目的トスルニ止マリ假差押ノ執行ノ方法ト爲ラス故ニ不動產ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押債権者ノ申立ニ因リテ執行裁判所カ假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スル旨ヲ登記判事ニ囁記シ登記判事カ此記入ヲ爲スニ因リテ之ヲ爲シ強制競賣ヲ爲スコトナシ(第七五一條、第七四八條、第六五一條、第六四一條)(デルンブルヒ民ハ其蓋曾漏西ノ私法論ニ於テ債権者カ直接ニ假差押ノ命令ノ記入ヲ登記官吏ニ申立ツルモノト言ヘリ)蓋シ此登記ニ依リ特定不動產カ假差押物タルコトヲ公示シタルヲ以テ爾後所有權ヲ取得シタル第三者カ強制競賣ヲ拒ムコトヲ得ス隨テ斯ル方法カ執行ヲ保全スルニ十分ナレハナリ後者ハ假差押ノ執行方法トシテハ適度ヲ超越スルモノトシテ獨逸民事訴訟法ノ認スナル所ナリ我民事訴訟法ハ普遍西ノ法律ト同シクスル假差押ノ執行方法ヲ認メタリ而シテ假差押ノ執行方法トシテ強制管理ヲ爲ス場合ニ於テハ假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スルノ外執行保全ヲ爲スヘキ債権ニ相當スル金額ヲ取立テ之ヲ供託シ假差押債権者ニ

交付セヌ蓋シ此強制管理ハ債権者ニ辨済ヲ得セシムル地獄ニ非ヌ要ヲ唯執行ヲ保全スルニ過キサレハナリ(第七五二條)不動産ニ對スル假差押ノ效力ノ存續ニ關シテハ前述シタル説明ヲ参考スヘシ債務者ハ假差押ヲ取消サレタル場合ニ於テ(第七四三條、第七五四條)登記記入ノ抹消ヲ求ムルコトヲ得ルキ當然ナリ
 (e) 船舶ニ對スル假差押ノ執行 船舶ニ對スル強制執行ノ方法ハ強制競賣ナリ(第七一七條)此保全ハ假差押ノ執行ヲ目的トスルニ止マリ假差押ノ執行方法ト爲ラス故ニ法律ハ船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ執行裁判所ア(第七一八條)債権者ノ申立ニ因リテ船舶ヲ差押ノ當時碇泊スル港ニ碇泊セシムルニ因リテ之ヲ爲スモノト定メタリ其他執行裁判所ハ假差押ノ執行トシテ假差押ノ命令ヲ船舶登記簿ニ記入スヘキ旨ヲ登記判事ニ囑託シ(第七四八條、第七一七條)又債権者ノ申立ニ因リテ船舶ノ監守例ヘハ流失ノ豫防(及ヒ保存浸水ヲ防キ腐蝕ヲ避タルノ類)ノ爲メニ必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得(第七五三條、第七一九條、第七二一條、第七四八條)
 一、賃金取扱い並び不動産ニ關スル諸種押付、衣類ヘ假押

假差押ノ執行ノ效力ノ存續ハ前述シタル所ト同一ナリ
 (c) 假差押ノ攻撃 終局判決ヲ以テ發シタル假差押命令ニ對シテハ控訴上告及ヒ故障ヲ以テ攻撃スルコトヲ得ルハ疊ニ述ヘタル所ナリ決定ヲ以テ發シタル假差押命令ニ對シテハ債務者カ唯異議ヲ以テ攻撃スルコトヲ得ルニ止マリ
 抗告ヲ以テ攻撃スルコトヲ得ス而シテ假差押手續ニ訴訟上ノ缺點アリタルト
 假差押命令ヲ第一審裁判所カ發シタルト抗告裁判所カ發シタルト又抗告裁判所ノ委任ニ因リテ第一審裁判所カ發シタルト否トノ區別ハ法律ノ間フ所ニ非ナルナリ是レ債務者ヲシテ假差押ノ當否ヲ確定スルコトヲ目的トル權利ヲ
 主張スルコトヲ得セシムルカ爲メナリ控訴上告及ヒ故障ハ茲ニ詳述スヘキモ
 ノニ非ナルヲ以テ單ニ假差押決定ニ對スル異議ノミヲ略述スルニ止ムヘシ(第七四四條)
 (d) 意義 假差押決定ニ對スル債務者ノ異議申立ハ債務者カ假差押決定ノ當否ノ確定ヲ目的トル權利ヲ主張スルノ形式ナリ故ニ該異議ニ關シテハ假差押決定ノ存否ヲ前提要件ト爲スヤ當然ナリ債務者ノ有スル假差押決定ノ當否ヲ確

定スルコトヲ目的トスル權利ハ假差押物ニ付キ爲シタル差押ノ解除若クハ債務者ノ協力ナクシテ爲シタル假差押ノ執行取消ニ因リテ消滅スルモノニ非ス體ヲ假差押ノ執行ノ取消ハ異議ノ目的ヲ消滅セシム。モノナリ外ノ理由ヲ以テ異議ノ申立ヲ妨クト論結スヘカラス又假差押ノ執行カ民事訴訟法第七百四十九條第二項ノ期間ヲ徒過シタルカ爲ミニ不能ト爲リタル事實若クハ假差押ノ執行不適法ナルコト等ヲ理由トシテ假差押ノ取消ヲ求ムルニハ民事訴訟法第五百四十四條第五百五十八條若クハ第五百四十六條ニ依ルヘク民事訴訟法第七百四十四條ニ依ルヘキモノニ非ス其他假差押ノ決定ハ唯之ニ對スル異議ノ申立ノミニ因リテ取消スコトヲ得假差押決定ノ取消ヲ目的トスル訴若クハ相手方ノ提起シタル訴ニ於テ假差押決定カ不適法又ハ不當ナル旨ノ抗辯ヲ以テ取消スコトヲ得ス這ハ異議ノ申立ヲ認メタル法意ヨリ生スル當然ノ論結ナリ又抗告ヲ以テ取消サシムルコトヲ得ス蓋シ假差押ノ命令カ執行手續ニ属セナルヲ以テ民事訴訟法第五百五十八條ヲ適用スルコトヲ得ス又民事訴訟法第四百五十五條ニ規定シタル要件ヲ具備セサルヲ以テナリ(第七四四條第一項)

(b) 裁判前手續
異議申立ノ形式辯論ノ準備及ヒ其進行ハ推ニ依リ訴ノ提起ニ關スル法則ニ依ル故ニ異議ノ申立ハ其權利者カ書面又ハ口頭ニ依管轄裁判所ニ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ハム旨ハ意思ヲ表示シテ之ヲ爲ス(第三七四條參照)異議ニ付キ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立ツルノ理由ヲ開示スヘキコトハ口頭辯論ノ準備ノ爲ミニスルニ外ナラズ(第一〇四條、第七四四條第二項可シ)、文字引用故ニ異議申立人ハ爾後之ヲ追完シ又ハ口頭辯論ニ於テ他ノ理由ヲ演述スルコトヲ得
債務者其承繼人並ニ債務者ノ財產ニ付キ破産手續カ開始セラレタル場合ニ於異議ノ申立ヲ爲スベキ期間ハ法律ノ規定セオル所ナリ故ニ(1)債務者ハ假差押ヲハ管財人ノミカ異議ヲ申立ツルコトヲ得第三者者ハ斯ル權利ヲ有セバ蓋シ第三者カ假差押手續ニ干與スル場合ニ於テハ民事訴訟法第五百四十四條第五百四十九條及ヒ第六百六十五條ノ準用アルニ遇キサレハナリ
決定ノ送達以前ニ於テ有效ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得蓋シ該送達ハ唯假差押ノ執行人ハメニ必要ナガモナレハナリ第七四八條第七四九條第一項(2)債務

者ハ民事訴訟法第七百四十三條ニ規定シタル供託ヲ爲シタル後ニ於テ有效ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得蓋シ該供託ハ假差押ノ執行若クハ其停止ヲ申立ツルノ理由ト爲リ假差押ノ決定ニ對スル異議ニ付キ何等ノ影響スル所ナケレハナリ(3)債務者ハ假差押ノ執行以後又ハ本案ノ起訴後ニ於テモ亦有效ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得ルハ疑ナキ所ナラズ此ノ點ニ就キ本件は假差押決定ノ申立ハ假差押決定ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス(第七三九條第五六十條)

三條是レ此種ノ裁判所カ異議ノ申立ニ關スル管轄裁判所ト爲スコトヲ得ス(第三一條)又民事訴訟法第七條ノ適用ナキヲ以テ假差押裁判所タル區裁判所ニ屬スルノ理由以テナリ故ニ(1)土地ノ管轄及ヒ事物ノ管轄ノ區別ヲ問ハス又本案カ既ニ成審般ノ裁判所ニ繫屬シタルト否トノ區別ヲ問フコトナク(2)當事者カ其合意ヲ以テ他ノ裁判所ヲ異議申立ニ關スル管轄裁判所ト爲スコトヲ得ス(第三一條)又民事訴訟法第七條ノ適用ナキヲ以テ假差押裁判所タル區裁判所ニ屬スルノ理由以テ地方裁判所ノ判決ニ對シ攻撃ヲ爲スコトヲ得(3)抗告裁判所カ假差押命令ヲ發シタル場合ニ於テハ此裁判所カ其發シタル命令ニ對スル異議申立ニ付キ裁判ヲ爲シ其前審タル假差押裁判所タルヘキ裁判所カ裁判スヘキモア非ニ

ス何トナレハ抗告裁判所ニ繫屬スル假差押事件ハ同裁判所カ假差押命令ヲ發スルニ因リ夫異議ノ申立ヲ留保シテ假ニ終局スルモノナルコトハ控訴裁判所若クハ上告裁判所ニ繫屬スル訴訟事件ニ同裁判所ノ言渡シタル關席判決ニ因テ故障ヲ留保シテ假ニ終局スルト同一ナレハナリ隨乞「ツキルモースキ」ストロップ・クマノ氏等ノ論結スルカ如ク抗告裁判所ハ其抗告ニ付キ裁判ヲ爲スニ因リテ職權ヲ終局ストノ理由ヲ以テ反對スルハ甚タ失當ナリ但シ抗告裁判所カ自ラ抗告事件ニ付キ假差押命令ヲ發スルコトナクシテ民事訴訟法第四百六十四條ニ基キテ下級裁判所ニ相當ノ裁判ヲ爲スベキコトヲ委任シタル場合ニ於テ其委任ニ基キ下級裁判所カ假差押命令ヲ發シタルトキハ該裁判所カ異議ノ申立ニ付キ管轄權ヲ有シ抗告裁判所カ假差押命令ヲ有セサルヤ言ヲ唆タス異議ノ申立ハ假差押命令と其執行ニ何等の影響ヲ及ボサス殊ニ假差押ノ執行を停止スルノ效力ナシ惟債務者ハ民事訴訟法第七百四十三條ニ從ヒテ供託ヲ爲シ以テ假差押ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ルノミ第七四四條第三項

(c) 裁判手續異議ノ申立アリタバトキ管轄裁判所ハ口頭辯論ノ爲メニ當事

者ヲ呼出しスヘシ(第七四五條第一項)此ノ如ク口頭辯論ヲ要スルハ異議人申立付ヲノ裁判ノ形式カ終局判決オルヲ以テナリ(第七四五條第二項)上終局判決⁽¹⁾異議ノ申立ニ付オノ口頭辯論ハ假差押申請ニ付フニ口頭辯論ト其性質共同シウス故ニ(1)口頭辯論ノ性質ハ義務的辯論ニシテ任意の辯論ニ非ス(2)當事者ノ地位モ亦假差押申請ニ於ケルモト同一ナリ債権者ハ假差押原告トシテ假差押ノ理由アルコトヲ主張シ且ツ之ヲ疏明シ債務者ハ假差押被告トシテ債権者ノ攻撃ニ對シ防禦ヲ爲スモノタリ但シ假差押原告カ異議申立ニ付スハ口頭辯論ニ於テ爲スベキ主張及ニ疏明ノ責任ハ假差押被告ノ爲シタル異議申立ノ範囲ヲ超越スベキモノニ非アルヲ以テ假差押被告ノ控訴審ニ於テ其異議ヲ申立ヲス且ツ前審カ判決セナリシ假差押命令ノ一部分ヲ攻撃スバノ權利ナシ假差押被告ハ該部分ニ付キ前審ノ管轄裁判所ニ對シ異議ヲ申立テサルベカラヌ蓋シ第二審ニ於テ新ニ異議ヲ申立ツルコトハ法律ノ許サナル所才レバナリ(3)辯論ノ目的ハ假差押請求其モハニシテ本審則チ假差押ニ因リテ保全セント又所債権ノ確定ニ非ス是ヲ以テ民事訴訟法第七百四十二條ノ規定ニ從ヒ終局

ノ判決ヲ爲ス場合ト同シク唯請求及ヒ假差押理由カ債務者ノ主張シタル反對理由ニ拘ラス法律上正當ニシク且ツ疏明セラレタルヤ誠ニ疏明ニ代ヘテ債権者ニ保證ヲ立テシメ假差押命令ヲ認可スルコトヲ適當ト爲スヤノ點ノミニ付キ辯論シ假差押ノ執行ニ付テノ異議ヲ主張スルコトヲ得ス(第五四四條)⁽⁴⁾請求及ヒ假差押理由ノ疏明ヲ爲ス責任ヲ負フ債権者ハ判決ノ言渡ニ至ルマテ又ハ控訴審ニ於テ新事實殊ニ假差押命令ヲ發シタル後ニ於テ成立シタル新事實及ヒ新ナル疏明方法ヲ假差押申請維持ノ爲メニ提出スルコトヲ得又債務者ハ異議申立書ニ掲ケサル抗辯殊ニ假差押命令ヲ發シタル後ニ於テ成立シタル抗辯ヲ提出スルコトヲ得⁽⁵⁾各當事者ハ其主張事實ニ付キ必要ナル以上ハ證明ヲ爲スコトヲ得ルモ證明ヲ爲スコトヲ得⁽⁶⁾(第二二〇條)

異議申立ノ裁判ノ目的ト同シク假差押ノ當否其モハニシテ假差押ニ因リテ保全セントスル請求ニ非ス又該裁判ノ形式ハ終局判決タリ是レ控訴及ヒ上告ヲ以テ不服申立ヲ爲スコトヲ得セシムルカ爲メナムシテ該判決ノ内容ハ假差押命令ノ全部又ハ一分ノ認可、變更及ヒ取消タリ而シテ法律

裁判所ニ其自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立フヘキヨドヲ假差押命令登記可變更及ヒ取消ノ條件ト爲ス權限ヲ認メ各當事者ノ利益ヲ平等ニ保護ゼント欲シタリ故ニ裁判所ハ債權者カ保證ヲ立フルコトヲ條件トシテ假差押命令ノ認可ヲ言渡シ債務者カ保證ヲ立フルコトヲ條件トシテ假差押命令ノ變更及ヒ取消ヲ言渡スコトヲ得第七四五條第二項第八七條其他假差押命令ノ全部又ハ一分ヲ取消シタル判決及ヒ債權者カ保證ヲ立フルコトヲ條件トシテ假差押命令ヲ認可シタル判決債務者ノ利益ノ爲ミニ假差押命令ヲ變更シタル判決ナリニハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ付ス(第五〇一條第四號是レ債務者ノ利益ノ爲ミニ即時ニ執行スルコトヲ得セシムルノ法意ニ外ナラス)蓋シ異議申立ニ付テ裁判ヲ爲スコトヲ中止スルコトヲ得ス蓋シスル場合ニ於テハ民事訴訟法第一百二十一條ニ規定シタル繁縝關係ノ存セザルノミナラス本案ニ關係ナク假差押ニ關スル裁判ヲ即時ニ爲スヘキ法意ニ反スルヲ以テナリ又管轄裁判所ハ假差押ノ申請ヲ口頭辨論ヲ經テ裁判スル場合ト同シク假差押原告カ辯論期日ニ出頭セザルトキハ調席

判決ヲ以テ假差押命令ヲ取消シ且ツ假差押ノ申請ヲ却下ス(第二四六條第二四七條異議ヲ申立タル假差押被告カ辯論期日ニ出頭セザルトキハ調席判決ヲ以テ假差押原告ノ口頭上事實ノ供述カ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ假差押被告ニ通知セラレ且ツ該供述カ假差押ノ申請ヲ正當ナリト認シタル場合ニ於テ假差押申請ノ理由タル事實ノ疏明アリタルモノト看做シ被告ノ異議申立ヲ排斥シ且ツ假差押命令ヲ認可スル旨ノ言渡ヲ爲ス蓋シ異議申立ニ付テノ辯論ニ於ケル當事者ノ地位ハ假差押申請ニ付テノ辯論ニ於ケル當事者ノ地位ト同シケレハナリ

異議申立ノ裁判ニ對シテハ故障並ニ上訴ヲ爲スコトヲ得又假差押命令ヲ取消シ又ハ變更シタル判決ノ提出ニ因リテ即時ニ假差押ノ執行ヲ停止シ且ツ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ヲ來シ第三五〇條第一號及ヒ第三號第五五一條第七四八條之カ爲ミニ判決ノ達達アルコトヲ要セス而シテ假差押命令ヲ認可ヲ假差押原告タル債權者ノ保證ヲ立フヘキ條件ニ繁縝場合ニ於テハ假差押被告タル債務者ハ債權者カ保證ヲ供託セナリトキニ於テ判決ニ基キカ民事訴訟法

第五百四十四條ニ則リ執行裁判所ニ假差押ノ執行ヲ取消ラ求ムルコトヲ得恨
差押命令ノ取消若クハ變更カ債權者ノ保證ヲ立ツヘキ條件ニ繫ル場合ニ於テ
ハ債務者カ公正證書ヲ以テ保證ヲ立テタルコトヲ證明シタルトキニ限り該取
消ヲ執行スルコトト爲ル(第五五〇條第三號其他管轄裁判所ノ債權者ノ申立ニ
因リ)第五〇六條民事訴訟法第五百四條及ヒ第七百五十九條ノ適用ニ依リ判決ノ
假執行ヲ除去シ若クハ之ヲ制限スルコトヲ得又控訴ノ提起アリタルトキニ民
事訴訟法第五百十二條ニ則リ判決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得立タル保証ノ
免責ニ關シテハ前述ノ説明ヲ参考スヘシ

(三) 假差押ノ取消
裁判所ハ債務者ノ異議ノ申立ニ因ラスシテ假差押命令ヲ取消シ又ハ其執行ヲ
取消スコトヲ得民事訴訟法第七百四十六條及ヒ第七百四十七條ハ前者ノ權限
ヲ認メタル規定ニシテ民事訴訟法第七百五十四條ハ後者ノ權限ヲ認メタル規
定ナリ左ニ之ヲ分説スヘシ

(A) 起訴期間ノ徒過ニ因ル假差押命令ノ取消
債權者ハ假差押命令カ發セラレ

タル當時ニ於テ未タ繁セナリシ本案ノ訴チ請命令ヲ發セラレタル後特定ノ
期間内ニ提起スルノ機縛ナシ然レトモ債權者ハ假差押裁判所ヲシテ債權者ニ
該訴ヲ提起スヘキ旨ヲ強制スルノ權利ヲ有メ蓋シ假差押手續ニ於テハ假差押
ニ因リ保全セントヌル本案ノ請求ハ適當ニ調査セラレナリシヲ以テ假差押命
令ヲ發セラレタル場合ニ本案ノ請求ノ存否及ヒ其效力ノ方法ニテ裁判セシム
ルコトニ付キ利益ヲ有スレハナリ是ヲ以テ我民事訴訟法ハ假差押裁判所即チ
事物上ノ關聯アル假差押命令ヲ發シタル裁判所ニ債務者ノ申立ニ因リ決定ヲ
以テ債權者ニ適當ノ期間内ニ本案ノ訴ヲ提起スヘキコトヲ命スルコトヲ得セ
シメ又債權者カ該期間ヲ徒過シタル場合ニ於テ終局判決ヲ以テ假差押命令ヲ
取消スコトヲ得セシメタリ(第七四六條(意義))
假差押裁判所カ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起スヘキコトヲ債務者ニ命スヘキ
コトヲ求ムル債務者ノ申立ニ假差押裁判所カ合議裁判所ナリトキハ書面ニテ
又本人モテ若クハ辯護士ヲ代理人トシテ之ヲ爲スコトヲ要シ區裁判所ナルト
キナロ頗モ又本人モテ若クハ辯護士ニアラタル者ヲ代理人トシテ之ヲ爲ス

コトヲ得(第七四六條第一項「債務者ノ申立」)第三七四條第一三五條蓋シ訴人提起ニ關スル法則ノ類推ニ依リ此申立ニモ亦準用セラルヘキモノナレハナリ其他假差押裁判所カ債務者ノ申立ニ因リ訴ヲ起スベキ旨ノ命令ヲ發スルニハ本案即チ假差押ニ因リ保全セント欲スル請書ニ關スル訴訟ノ未タ通常裁判所ニ繫屬セナルコトヲ要ス第一九五條第三八七條(仲裁契約アル場合ニ於テハ仲裁手續ノ着手ナキコトヲ要ス)然レトモ該要件ハ債務者カ其申立ノ前提要件トシテ立證スヘキモノ非シナ却テ假差押原告カ民事訴訟法第七百四十六條第二項ニ基タル申立ニ對スル防禦方法トシテ本案ニ繫屬ヲ主張スヘキモノタリ但シ假差押命令ノ形式カ決定ナシト判決オムト假差押命令認可ノ判決力確定シタルト否^ト第七四二條第七四五條債務者カ保證ヲ立テ假差押ノ執行ヲ免レタルトキ否^ト第七三四條ノ區別ハ法律上間ノ所ニアラス殊ニ後者ノ場合ニ於テハ債務者ハ假差押命令カ尙ホ存在シ且ツ債務者カ其立タル保證ノ返還ヲ受クルカ爲メニ債権者ニ訴テ起サンシムヘキノ利益ヲ有ス(但シ假差押命令之付キ頭辯論ヲ經スシテ決定ノ形式ヲ以テ裁判假差押裁判所ハ前示ノ申立ニ付キ口頭辯論ヲ經スシテ決定ノ形式ヲ以テ裁判)

然レトモ之カ爲メニ債権者ア審訊スルコトハ法律上禁制ガ所ニアラス、裁判所カ申立ヲ正當ト認メル、キハ決定ヲ以テ其意見ニ從ヒテ相當ノ期間ヲ定メ其期間内ニ起訴スヘキ旨ヲ債権者ニ命ス該期間内ニ該命令ヲ債権者ニ送達スルニ因リテ其進行ヲ始メ裁判所ノ休暇ニ因リテ其進行ヲ停止セヌ又當事者ノ合意若クハ申立ニ因リテ裁判所ノ伸縮スル所ト爲ル(第一七〇條、裁判所構成法第一二九條、獨逸裁判所構成法第二〇二條第二號該期間内ニ爲スヘキ訴り提起ハ通常若クハ證書訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ナリ(仲裁判斷ノ手續ノ開始亦然ラン督促手續ニ於テハ「ガウグ」^{ラキル}モースキーモ等ノ論結ノ如ク請求ニ付キ起スヘキ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ支拂命令ヲ送達シ起訴ト同一之債権ヲ有シ第三九〇條第三八七號地方裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ之ニ反ダフ債権者カ訴ヲ起シタルコトヲ要ス第三九一條蓋シ前者ノ場合ニ於テハ訴ノ提起ト看做スヘキモノニシテ後者ノ場合ニ於テハ債権者カ原告シテハ特無訴ヲ提起スヘキコトヲ要スハナリ「ストロツタボウ」「アキラヘルド」「ハルカシ民等カ訴ヲ起ス可キコト……」(第七四六條ノ明文ニ依リ督促手續ヲ絶対的而除外レ

タルハ民事訴訟法第三百九十條ヲ無視シタル失當ノ論結ナリ又假差押ヲ因リ
ヲ保全セント欲スル請求カ期限附若タハ條件附ナシトキハ假差押原告ハ難確
認訴訟ヲ提起スルヲ以テ足ル猶民事訴訟法第二三一條假差押被告ハ既に訴
ヲ提起シタルトキハ適法ナル反訴ノ提起ヲ以テ亦足レリトス相當期間内ニ起
訴スヘキ旨メ決定ハ職權ヲ以テ假差押當事者双方ニ送達ス第二四五條第三項
而シテ債権者ハ該決定ニ對シ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス何トナレハ此決定ハ
假差押ノ執行ヲ目的ト爲スモノニ非サルヲ以テ民事訴訟法第五百五十八條ヲ適
用ナケレハナリ本案カ既ニ繫屬シタルコト若タヘ起訴ヲ爲メニ定ムラレタル
期間カ甚タ短期ニ失シタルコトノ異議ハ債権者カ民事訴訟法第七百四十六條
第二項ニ規定シタル申立ニ關スルロ頭辯論ニ於ク提出スヘキモノタリ裁判所
カ申立ヲ不當ト認メタルトキ殊ニ形式上ノ理由ヲ缺キ若クハ訴ノ提起カ法律
上不能ナルモノト認ムタルトキハ決定ヲ以テ該申立ヲ却下スルノ裁判所爲ス
該裁判ハ唯申立者タル債権者ノミニ送達シ(第二四五條第三項)又債務者ハ該裁
判ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得第四五五條債務者ハ申立ニ適セタル長キ期間ヲ

定メタルトキハ申立ノ一部却下ノ裁判ナルヲ以テ債務者ハ之ニ對シ不服ヲ申
立ツルコトヲ得裁判前手續)(本件は第二回八番開幕時未だ既に認定済み)
債権者カ裁判所ノ定メタル期間内ニ起訴シタルトキハ其訴訟法要件ヲ具備
セナルト又受訴裁判所カ管轄權ヲ有セタルト間ハス民事訴訟法第七百四十
六條第二項ニ基ク假差押命令ノ取消ヲ悲起スコトナシ蓋シ同條第一項ノ命令
ハ訴ノ提起ニ因ツテ充實セラレタレハナリ但シ該訴カ管轄遠若クハ訴訟上ノ
要件ヲ缺クノ理由ニ依リ却下セラレタルトキハ此限ニ在ラス債権者カ裁判所
ヲ定メタル期間内ニ起訴セサルトキハ假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ口
頭辯論ヲ經テ終局判決ヲ以テ假差押命令ヲ取消スノ論旨ナリ假差押裁判所ハ頭辯論ノ爲メ
債務者ハ假差押命令取消ノ終局判決ヲ受タルカ爲メ債権者カ起訴期間ヲ徒過
シタル後假差押裁判所ニ申立ヲ爲シフアンダ民カ債権者ニ對スル訴ヲ以テ爲メ
スト云ヘルハ法文ニ根據ナキ失當ノ論旨ナリ假差押裁判所ハ頭辯論ノ爲メ
ニ當事者雙方ヲ呼出ス是レ假差押命令取消ノ裁判カ終局判決ノ形式ナガリ復
生スル當然ノ結果ナリ(第七四六條第二項)終局判決ヲ以テ)

此義務的口頭辯論ニ於テ債務者ハ假差押命令取消ヲ求ムル申立ヲ債権者カ起訴期間ヲ徒過シタル理由ニ依リテ不當ナラシテ債権者ハ起訴期間内モ訴ヲ提起シタルコトヲ主張シ且ツ立證シ又債務者ハ該訴カ取下ケラレ若クガ管轄遠又ハ訴訟上ノ要件ノ欠缺ニ因リテ却下セラレタルコトヲ主張シ且ツ立證セラバヘカラス債権者カ起訴期間徒過後口頭辯論終結以前ニ於テ訴ヲ提起シタルトキハ假差押命令取消ヲ免ルコトヲ得(第一七三條獨逸民事訴訟法第二〇九條第二項)然レトモ債権者ハ斯ル場合ニ於テ債務者ノ正當ナル申立ノ爲メニ成立シタル費用ヲ負擔セサルヘカラス何トナレハ斯ル場合ニ於テハ債務者ノ申立ヲタル請求ニ對スル債権者ノ爾後ノ認諾カ成立シタレハナリ(第二二九條)假差押裁判所ハ債権者カ起訴期間内ニ訴ヲ提起シタルコトヲ證明セナルトキハ終局判決ヲ以テ假差押命令取消ヲ命シ反對ノ場合ニ於テハ債務者ノ申立ヲ却下ス而シテ債権者カ辯論期間ニ出頭セサルトキハ起訴期間内ニ訴ヲ提起セナル事實ヲ自白シタルモノト看做シ(第二四八條)終局判決ヲ以テ假差押命令取消ヲ言渡シ債務者カ辯論期間ニ出頭セナガトキハ終局判決ヲ以テ其申立

ヲ却下ス(第二四七條)該闕席判決カ確定シタルトキハ債務者ハ民事訴訟法第七百四十六條第一項ニ從ヒテ更ニ申立ヲ爲シ債権者カ起訴期間ヲ徒過シタル場合ニ於テ同條第二項ニ從ヒテ更ニ假差押命令取消ノ申立ヲ爲スコトヲ得蓋シ債務者ノ申立却下ノ判決ハ現實的解消ノ結果ヲ言渡シタルニ外ナラズハナリ假差押命令取消ノ申立ニ關スル裁判ノ形式カ終局判決九ル理由ハ上訴若クハ故障ヲ許スノ法意ニ外ナラス故ニ各當事者ハ上訴若クハ故障ヲ爲スコトヲ得シ假差押命令取消ノ判決ニハ闕席ナルト否トニ拘ラス職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ付セサルヘカラス(第五〇一條第四號)債権者カ假差押ノ執行費用ヲ包含スル假差押訴訟費用ヲ負擔スヘキ旨ヲ言渡ササルヘカラス又該判決ニ基キテ債務者ハ假差押ノ執行ヲ停止シ又既ニ爲シタル執行處分ノ取消ヲ求ムルコトヲ得(第五五〇條第一號第五五一條)ハモニモ既判事項又は既判事項又は既判事項の審理(B) 情況ノ變更ニ因ル假差押命令取消ヲ債務者ハ假差押命令ヲ發セラレバ當時ニ於ケル情況カ變更シタルトキハ假差押命令其モナシ不當ニ非スシテ

却テ其繼續ノ不當ニ付キ申立ヲ爲シ以テ假差押命令ノ取消若クアリ變更ヲ求ムルコトヲ得假差押ノ執行ノ取消ヲ求ムルモノニ非ヌ(第七四三條、第七五四條)而シテ假差押命令ノ形式カ決定タルト判決タルト又決定タル假差押命令カ爾後終局判決ヲ以テ認可セラレタルモノナルド(第七四五條)否トヲ問ハナル所ナリ債務者カ情況ノ變更ヲ假差押命令ニ對スル異議ニ付テノ手續ニ於テ若クハ民事訴訟法第七百四十二條及セ第七百四十五條ニ基キテ下サレタル判決ニ對スル控訴審ニ於テ主張スルコト不得ルコトハ毫モ民事訴訟法第七百四十七條ニ基ク申立ヲ爲スノ妨ト爲ラス蓋シ同條ニ於ケル「假差押ノ認可後ト雖モ」ノル法文ハ債務者カ假差押ノ認可以前ト雖モ其選擇ニ從ヒテ情況ノ變更ニ因ル假差押命令ノ取消ヲ求ムル申立ヲ爲スア得ル旨ヲ明示スレハナリ隨テ假差押命令ヲ認可シタル終局判決ノ存セアル以上ハ債務者ハ情況ノ變更ニ因ル唯異議ア申立フルコトヲ得ルニ過キストノ見解ヲ採ルニ足ラス情況ノ變更トバ假差押命令ノ必要ナル前提要件人消滅シテ假差押命令ヲ發スル當時ニ就ク裁判所カ認メタル假差押ノ前提要件人一カ客觀的ニ變更スル場合及ヒ債務者カ爾後

其實ナル事情ヲ知リタルカ爲メニ假差押ヲ前提要件ノ一カ主觀的ニ變更シタル場合ヲ包含ス而シテ情況ノ變更ノ有無ヲ定ムルノ標準期ヘ假差押命令ヲ發シタル時期ニシテ假差押命令ノ認可判決ノアリタル時期ニアラス蓋シ假差押命令か前者ノ時期ニ於テ有效ニ存在スレムナリ情況ノ變更ト認ムヘキ場合ノ第一ハ假差押ニ因リテ保全セント欲スル本案ノ請求ノ消滅若クハ本案訴訟ノ終局判決ニ於テシタル請求ノ棄却タリ然レトモ本案ノ請求權ノ消滅若クハ原告ノ本案請求ノ棄却ハ假差押命令ヲ取消ス實體法上ノ理由タルニ止マリ其直接ノ結果トシテ當然假差押命令カ取消アルモノニアラス蓋シ假差押命令シ之ト反對スル裁判ニ依リ取消サルマテハ有效ニ存續スルモノナレハナリ被告ハ本案ノ訴訟ニ於テ其口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ假差押命令取消ノ申立ヲ爲シ以テ本案ノ裁判ト共に該取消ノ裁判ヲ受タルコトヲ得第七四七條第二項本案カ既ニ繁屬シタル事由並引用アスル申立ヲ爲サナリシ事キハ縱合原告ノ請求ヲ棄却シタル判決ヲ未だ確定セサルトキト雖モ特別ノ手續立從ヒ第七四七條假差押命令取消ヲ受タルコトヲ得而シテ管轄裁判所カ其

自由ナル意見ニ從ヒク原告ノ請求棄却ノ判決カ上級審ニ於テ變更セラルルト
トオシト思科シタル場合ニ於テ唯該判決ノ提出ノミカ假差押命令取消ノ判
決ヲ爲スニ足ガ是ヲ以テ管轄裁判所ハ該判決ノ確定ニ至シマナ民事訴訟法第
七百四十七條ニ基ク裁判ヲ中止スルコトヲ得ス其他債權者ノ請求ヲ非認シタ
ル判決カ債權者ノ訴ニ基キタルト債務者ノ消極的確認訴訟ニ基キタルト又判
決ヲ以テ棄却セラレタル請求カ當時期限ノ到来セサリシモノナルトハ假差押
命令取消ノ判決ヲ求ムルニ付キ何等ノ影響スル所ナシ何トナレハ假差押ニ因
リテ保全セントスル請求ノ非認カ債權者ノ訴ニ基キタルト債務者ノ訴ニ基キ
タルトニ依リテ其效力ヲ異ニスルノ理ナタ又假差押ハ常ニ特定シタルト且ツ
確實ニ主張セラレタル請求権ノミニ關スルニ止マルヲ以テ期限附債權ノ爲メ
シ尙ホ假差押ヲ爲スコトヲ得ルノ理由ハ即チ他ノ原因ニ基キ假差押ヲ維持ス
ルコトヲ得ルノ理由ハ假差押命令合ノ取消ヲ妨タルニ足ラサレハナリ第二ハ假
差押理由ノ消滅オリ蓋シ斯ル場合ニ於テハ假差押命令有無セシムルノ理由
ヲ察レハナリ故ニ外國ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ルヘキ情況カ消滅シタル

カ如キ場合第七三八條ベ斯ル情況アルガ傍メニ發シタル假差押命令取消ノ原
因ド爲ル第三ハ債務者カ爲シタル裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ムヘキ保證
ヲ立ツシトノ提供ナリスル保證ヲ立タルコトハ唯リ假差押命令ノ執行ヲ取消
スノ效力アリ蓋シ假差押原告ハ斯ル保證ノ爲メニ假差押ノ命令又バ其執行ノ取消
アルモ不利益ヲ被ルコトナケレバナリ此效力ハ保證ヲ立ツルコトニ因リテ發
生シ保證ヲ立ツルコトノ提供ニ因リテ發生セヌ故ニ假差押命令ノ取消ノ判決
言渡以前ニ於テ保證ヲ立ツナリシ場合ニハ該判決ニ於テ其執行ノ條件トシテ
保證ヲ立ツルコトヲ言渡サナルベカラス立ツル保證ガ如何ナル效力ナ生ス
ルカ民法ニ従ヒカ定ムハ所ナリ第四ハ本案訴訟書クハ假差押訴訟ニ於ケル
當事者ノ和解ダリ債務者ノ財産ニ付キ開始ヲレタル破滅カ情況ノ變更トシ
カ假差押命令取消ノ原因ニ基テナリコトバ學者間ニ爭ナリ假差押原告
ノ假差押被售カ假差押宣言ヲ受クタルカ爲スニ各別的ニ執行ヲ爲スコトヲ得ラ
ル人主導權ハ單獨ニ來ハシ申立てテスルオチハ假差押訴訟ニ於ケル

假差押命令ノ取消ヲ求ムル申立アリタルトキハ管轄裁判所ハ口頭辯論ヲ經テ終局判決ヲ以テ裁判ス申立形式。以假差押命令ニ對スル異議申立ニ付セ明シタル所ト同一ナリ以テ参考アリム第七四四條第一項假差押命令取消申立付債務者若クバ其一般承繼人公爲シ能フ所ニシテ其特別公承繼人債權者及ヒ第三者ノ爲シ能ハナム所ナリ假差押命令ノ取消ハ債務者ノ利益ニ歸スル利大ナルヲ以テ債務者若クバ一般承繼人ノ申立ヲ必要トシ裁判所ハ假合本案ノ訴訟ニ於テ債權者ノ請求ア非認シタル場合ト雖モ職權ヲ以テ假差押命令ヲ取消スコトヲ得ス特別公承繼人ノ假差押命令取消ノ訴訟手續ニ於テハ第三者ニシテ債務者ノ代理人ニ非ス故ニ民事訴訟法第五百四十九條ニ基キ其權利ヲ主張スルコトヲ得ヘキモノニシテ民事訴訟法第七百四十七條ニ基キテ假差押命令取消ヲ申立ツルハ權利ナシ債權者ハ其利益ノ爲スニ有スル假差押ノ權利ヲ使用スルノ自由ヲ有スルカ故ニ假差押人取消ヲ求ムル申立權ヲ有スルノ必要ナキノミナラス民事訴訟法第七百四十七條ノ取消ハ假差押ヲ存続スヘキ情況人有無ニ關スル攻撃力ヲ以テ假差押人申立ヲ爲シ該命令ヲ得タル債權者カ

斯ル攻撃ヲ爲スコトヲ得テハナリ^{〔第七四七條第二項……終局判決……〕}又ハ該命令付キニ於テ假差押命令ノ管轄ニ付セ申立ハ本案カ既ニ繫屬シタルトキア其辯論期日ニ於テ之ヲ爲シ本案カ繫屬セス若クハ繫屬スルヲ得ス又ハ債務者カ急速ニ終局ノ爲スニ別障ノ主張ヲ欲スルトキハ獨立的ニ之ヲ爲ス後者ノ場合ニ於テハ裁判所ハ假差押命令ニ對スル異議ハ申立ニ於ケルカ如ク^{〔第七四四條第七四五條第七四六條假差押原告ヲ辯論ノ爲メニ呼出ナシタルヘカラス何トナレハ假差押命令取消ノ形式ハ終局判決ナルヲ以テ義務的口頭辯論ニ依ルニ非スンハ申立ニ對スル裁判ヲ爲スコトヲ得テハナリ}〔第七四七條第二項……終局判決……〕又ハ該命令付キニ於テ假差押命令ノ管轄ニ付セ申立ニ付スノ裁判ハ本案ノ繫屬シタル裁判所ハ即時ニ假差押命令取消ノ裁判ヲ爲シ^{〔第五〇一條第四號參照〕}假執行ノ宣言ヲ拒絶スヘキ旨ヲ規定シタル屬シ假差押命令カ該裁判所ヨリ發セラレタルト否トヲ問ハサルナリ又本民事訴訟法第五百四條及第五百五條ノ適用ニ依リ假差押命令取消ヲ本

案ノ請求棄却判決ノ確定ニ繫スルが如トア得ヘキ地位ニ在ルヲ以テ又假差押裁判所ハ假差押ノ命令ノ取消ト事物上ノ開墾石ルヲ以テナリ(裁判前手續)。假差押取消ノ申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス第七四七條第二項故ニ此裁判ハ第一ニ義務的口頭辯論ニ基カツルヘカラス此辯論ノ目的ハ假差押命令其モノノ當否ニ非スレテ其存續ノ當否ナリ一旦正當ト認メテ發セラレタル假差押命令又爾後ノ情況ノ變更ノ爲メテ取消スコトノ當否ナリ故ニ假差押被告タル債務者カ攻撃者即チ原告トシテ取消ノ原因タル情況ニ付キ疏明ヲ爲スヘキ責任ヲ負フ第工ハ假差押命令ノ形式カ決定ナル場合ト雖モ終局判決ヲ以テ之ヲ爲サシテヘカラス是レ控訴及ヒ上告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトア得セシムルカ爲メナリ隨て債務者カ辯論期日ニ出頭セサルトキハ開席判決ヲ以テ假差押命令取消ノ申立ヲ却下シ債權者カ辯論期日ニ出頭セサルトキハ債務者ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シテ然モト看做シ假差押命令取消メ申立ニ付キ裁判ス(第二四六條乃至第二四八條其他終局判決ノ内容ハ假差押命令全部ノ取消ニ限ルモノニ非ス其變更殊ニ假差押命令ノ取消ヲ債權者ノ保證ヲ立ツルコ

(七) 指定又ハ其取消ノ届出ハ既ニ效力ヲ生ダル事項ノ届出ニアラスシテ法律上ノ效力ヲ生ゼシムル爲メノ届出ナリ而シテ無能力者ハ法定代理人ノ同意ナシテ指定又ハ其取消ヲ爲スコトヲ得タク法定代理人ハ無能力者ニ代リテ指定又ハ其取消ヲ爲ス權限ヲ有セサルカ故ニ被相続人カ無能力者ナシトキト雖モ自ラ届出ヲ爲スコトヲ要シ法定代理人ハ之ニ代リテ届出ヲ爲スヲ得ス次ニ家督相續人指定ノ取消ノ届出ヲ爲ス場合ニ於テ爲スヘキ指定ノ登記ノ取消ノ申請及ヒ前(六)ニ説明シタル指定ノ登記ノ取消ノ申請ヘ何レモ私法上ノ威效力ヲ發生セシムルコトヲ目的トスル申請ニアラスシテ戸籍法第百四十三條以下三條ノ規定ニ依リ公法上ノ義務トシテ爲スコトヲ要スル申請ナリ然レトモ家督相續人ノ指定又ハ其取消ハ未成年者若クハ禁治產者ト雖モ法定代理人ノ同意ヲ得スシテ爲スコトヲ得タ行爲ナルカ故ニ此等ノ行為ニ基因タル前示登記取消ノ申請モ亦戸籍法第六十七條第四十七條ニ依リ無能力者自ラ之ヲ爲スコトヲ要スルモノニス覽文同法第六十七條第四十六條ニ依リ其法定代理人人カ申請義務者ト爲シ命を附ス在テスル時ニ於テ之ヲ爲スル事項ニ依リ大申願

人注意前(六)ノ登記取消ノ申請ハ指定ノ效力ヲ失ハシムル爲ミニ爲ス申請ニ
該アラス隨テ指定カ未タ其效力ヲ失ハサル上拘ラヌ誤ミテ此申請ヲ爲シタル
示メトテ前ニ爲シタル指定ノ届出ハ依然トシテ其效力ヲ保有スル者自ミニ又
之同意ミル第十六節 入籍離籍、復籍拒絶、及也離籍復籍拒絶又ハ
夫家離籍人ハ晉家又ハ復籍スベキ家ノ廢絶ニ因ル一家創立ノ届出
第十七節 総論 款ニ趣ミタル者ニテ夫婦イモウトスニイテ夫妻スル事體大又然
一、本節ニ於テヘ戸籍法第四章第十六節ノ規定ヲ説明スヘシ道役百四十三
戸籍法第四章第十六節ニハ入籍ノ届出、離籍ノ届出離籍ニ因ル一家創立ノ届出
復籍拒絶ノ届出、復籍拒絶ニ因ル一家創立ノ届出及ヒ復籍スベキ家ノ廢絶ニ因
ル一家創立ノ届出ヲ規定シアリ夫婦人ハニニ力ミテ届出マ事件ニ付
二、入籍以下六種ノ届出ハ何レモ家ノミニ開スル届出ナリ婚姻其他ノ届出少
如ク家及ビ親族關係ニ關スル届出ニアラス又夫婦人ハ離婚改嫁ニ力ミテ
第三、入籍ノ届出 ムハ既スヘ届出ナリ而ニ夫婦代管ハ夫婦力無人、同意
(一) 乙家ニ在ル者ハ左ノ條件ヲ具備スルトキハ甲家ノ家族ド爲ルコトヲ得民

法第七三七條

第一、入籍セントスル者(乙家ヨリ甲家ニ入ラントス者)ハ甲家ノ戸主ノ親
族ナルコトヲ要ス

第二、甲家人戸主人同意ヲ得バコトヲ要ス

第三、入籍セントスル者カ未成年者カルトキハ親權ヲ行フ父若クハ母又ハ
後見人ノ同意ヲ得バコトヲ要ス(但シ公認者又は甲家ノ親族ナルトキハ乙家ノ
第四、入籍セントスル者カ乙家ノ家族ナルトキハ乙家ノ戸主ノ同意ヲ得バ
コトヲ要ス

第五、入籍セントスル者カ乙家ノ戸主カルトキハ隣居ヲ爲シ又ハ其家ノ屋
カスルコトヲ要ス(乙家ノ戸主カ隣居ヲ爲ストキハ同時ニ乙家ノ家族ト爲ル
カ故ニ其者ノ隣居ニ因リ新ニ乙家ノ戸主ト爲シタる者ノ同意ヲ得ルコトヲ
要スルハ勿論ナリ)

第六、入籍セントスル者カ乙家ノ戸主ハ法定人推定家督相続人アリト要ス
廢除セラルニ非サレバ甲家ニ入ルト得ス(民法第744條)

第七十入籍セシトスル者ヨリ後ノ(四)ニ掲タル届出ヲ爲スコトヲ要ス 民法第七百三十七條ニハ入籍シ意思表示ニ付シノ方法ヲ規定セシム然レドモ月籍法第一百四十六條ニハ「民法第七百三十七條ノ規定ニ依リ他家ノ家族ト爲ラント欲スル者(中略)左ノ諸件ヲ具シテ入籍ノ届出ヲ爲スコトヲ要ス」下規定シアルカ故ニ入籍セシント欲スル者ハ同條ノ規定ニ從ヒタル届出ニ依リテ其意思ヲ表示スルコトヲ要シ月籍處カ此届出ヲ受取スル日キニ入籍ノ效力ヲ生スト爲サナルヘカラス

(二)婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ甲家ニ入りタル者ハ左ノ條件ヲ具備スルトキハ其配偶者又ハ養親ハ親族ニ非ナル自己ノ親族ヲ乙家ヨリ引取リテ甲家ノ家族ト爲スコトヲ得(民法第七三八條第十一項)イナヘ雖雖モ旨く父告モヘ若夫ヘ

第一 甲家ノ戸主ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二 入籍セシメントスル者(甲家ニ在ル者ヲ指ス)カ未成年者ナルトキハ親權ヲ行フ父若タハ母又ハ後見人ノ同意ヲ得ルコトヲ要スハ甲家ノ戸主ノ同意

第三 入籍スヘキ者(乙家ニ在ル者)カ乙家ノ家族ナルトキハ乙家ノ戸主ノ同意

ノ第六ト同シ

第四 入籍スヘキ者カ乙家ノ戸主ナルトキハ前(一)ノ第五ト同シ

第五 入籍スヘキ者カ乙家ノ戸主ノ法定ノ推定家督相續人ナルトキハ前(一)

ノ第六ト同シ

第六 入籍セシメントスル者ハ其配偶者又ハ養親ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第七 入籍セシメントスル者ヨリ後ノ(四)ニ掲タル届出ヲ爲スコトヲ要ス

此届出ヲ爲シ戸籍吏カ之ヲ受理スルニ非ナレハ入籍ノ效力ヲ生セス第一四

六條参照

次ニ婚姻又ハ養子縁組ニ在リタル者ハ前同一ノ條件ヲ具備スルトキハ其家ニ

在ル自己ノ直系卑属ヲ引取リテ自己ノ現住屬スル家甲家ノ家族ト爲スコトヲ

得(民法第七三八條第二項)三十八年未満者ノ現住屬スル家甲家ノ家族ト爲スコトヲ

(三)民法第七百三十七條前(一)ノ場合ハ入籍スヘキ者ノ意思ニ基カルコトヲ要シ

民法第七百三十八條前(一)ノ場合ハ入籍スヘキ者ノ意思ニ基カルハ勿論其者

ノ承諾ヲ得ルコトヲ也要セス

(注意) (イ) 民法第七百三十八條ニ付テハ解釋區區ナリ然レトモ詳細ハ民法
ノ講義ニ譲ヲ異説ヲ列舉セス入籍スヘキ者ノ意思ニ基ルモ此ノ事項
(ロ) 民法第七百三十八條ハ舊民法人事編第二百五十六條ヲ修正シタルモノ
ナリ(民法修正案参考書第七百三十八條ノ説明参照)而シテ舊民法ニ在リテハ
入籍スヘキ者ノ意思ニ基カツルコトニ疑フ容ルノ餘地ナシ
(ハ) 民法第七百三十八條ヲメ説ノ如ク解釋スルトキハ入籍スヘキ者ノ意
ニ反シテ入籍セシムルヲ得ルカ如キ種種ノ不都合ヲ生ス然レトモ規定ノ不
備ナルヨリ生スル已ム得ナルノ缺點ナリ

(四) 民法第七百三十七條ノ規定ニ依リ他家ノ家族ト爲フント欲スル者前(一)參
照又ハ民法第七百三十八條ノ規定ニ依リ自己ノ親族ヲ婚家、養家又ハ自家ノ家
族ト爲サント欲スル者前(二)参照ハ左ノ諸件ヲ具シテ入籍ノ届出ヲ爲スコトヲ
要ス第一四六條

一 入籍スヘキ家ノ戸主ノ氏名、出生ノ年月日、職業及ヒ本籍地
二 入籍スヘキ家ノ戸主又ハ家族ト入籍スヘキ者トノ親族關係 民法第七

(一) 百三十七條ニ依ル場合ニ在リテハ入籍スヘキ家ノ戸主ト入籍スヘキ者ト
ノ親族關係ヲ記載スルヲ要ス同様ニ依ル場合ニ在リテハ入籍スヘキ
家ノ家族ト入籍スヘキ者トノ親族關係ヲ記載スルヲ要スルコトナシ
合ハ民法第七百三十八條ニ依ル場合ニ在リテハ入籍セシムントズル者ガ戸主
ヘ出ナルトキト其者戸主ト入籍スヘキ者トノ親族關係ヲ記載スルヲ要ス之ニ
既成反シテ入籍セシムントズル者カ家族ナルトキハ其者家族トノ親族關係ヲ
記載スルヲ要シ入籍スヘキ家ノ戸主トノ親族關係ヲ記載スルヲ要セス
出キ要スルニ民法第七百三十條ノ場合ニ在リテハ入籍スヘキ家ノ戸主ト入籍
ヘ出スルキ者トカ親族ナルヨドツテ要シ第七百三十八條ノ場合ニ在リテハ入籍
セシムントズル者本入籍スルキ者トカ親族ナルヨドツテ要スルガ故ニ其親
族關係ヲ記載セシムルナリムニ署名捺印等の手續ニ依リ要スル事項一四二条
次三 入籍スヘキ者カ戸主シテ他家ニ入ルトキハ其旨又前(一)ノ第五及ヒ前(二)
入籍ノ第四ヲ参照スヘシ要ノ事項並て當更ヘ簽見人ノ同意を要スル事項(一)
四 入籍スヘキ者カ其去ルハ其家ノ家號ナルトセハ其家戸主ノ氏名出生

四ノ年月日、職業、本籍地及ヒ其戸主トハ離籍スヘキ者トニ續柄其主又異居出来入籍ニ付キ戸主配偶者、養親、親権ヲ行フ者又ハ後見人ノ同意ヲ要スル場合(前(一)及ヒ(二)参照)ニ於テハ届出人ハ届書ニ同意ハ證書ヲ添ヘ又ハ同意ヲ爲シタル者ラシナ届書ニ同意ノ旨ヲ附記シ之ニ署名捺印セシムルコトヲ要ス(第一四七條)
 (五)既ニ述ヘタル如ク入籍ハ届出ニ依リテ其效力ヲ生スルカ故ニ入籍人届出ハ既ニ生シタル事項ニ付キ戸籍法上ノ義務トシテ爲ス届出ニアラス體テ此届出ニ付ナハ月籍法第四十六條ヲ適用スベキ限ニ在ラヌ又ハ季節ノ異居出来入籍ハ月籍法第百四十六條及ヒ第百四十七條ニハ民法第七百三十五條第一項ノ規定ニ依リ入籍スル場合アルカ如ク規定シズリ然レヒモ民法第七百三十五條ハ出生シタル子ノ入札ヘキ家ニ属スル規定ニシテ一ノ家ヨリ他ノ家ニ入ル場合ニ關スル規定ニアラス隨テ同條第一項ニ依リテハ入籍ヲ爲スヲ得ルコトナシ
 (六)戸籍法第百四十六條及ヒ第百四十七條ニハ民法第七百三十五條第一項ノ規定ニ依リ入籍スル場合アルカ如ク規定シズリ然レヒモ民法第七百三十五條ハ出生シタル子ノ入札ヘキ家ニ属スル規定ニシテ一ノ家ヨリ他ノ家ニ入ル場合ニ關スル規定ニアラス隨テ同條第一項ニ依リテハ入籍ヲ爲スヲ得ルコトナシ
 (第三)離籍ノ届出及ヒ離籍モ因ル一家創立ノ届出場合ニ准メテ入籍スルハ左ノ場合ニ於テハ戸主ハ其家族ヲ離籍スルコトヲ得離籍トハ戸主權ヲ行

使シテ戸主家族ノ關係ヲ絶ツコト開フ
 第一 家族カ戸主ノ意ニ反シテ其居所ヲ定メタル場合ニ於テ戸主カ相當ノ期間ヲ定メ其指定シタル場所ニ居所ニ轉スルキ旨ヲ催告シタルモ家族カ其催告ニ應ニナルトキハ戸主ハ之ヲ離籍スルコトヲ得但シ家族カ未成年者ナシトキ又ハ法定ノ推定監督相親人ナシトキハ此限ニ在ラス(民法第七四九條、第七四四條第一項) 参考書は其妻ハ離籍モ其夫ハ離籍モ不得
 第二 戶主ノ同意ヲ得シテ婚姻ヲ爲シ又ハ養子縁組ヲ爲シタルトキハ戸主ハ其婚姻又ハ養子縁組ノ日ヨリ一年内ニ離籍ヲ爲スコトヲ得民法第七五〇條参考書は其妻ハ離籍モ其夫ハ離籍モ不得
 第二 戶主ノ親族會ノ同意ヲ得シテ婚姻ヲ行フ者又ハ後見人カ戸主ニ代リ戸主カ無能力者ナシトキヤ之ニ對シテ親権ヲ行フ者又ハ後見人カ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲スコトヲ得但シ繼父母嫡母又ハ後見人カ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲スハ戸主ノ親族會ノ同意ヲ得シテ婚姻ヲ行フ者又ハ後見人カ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲スコトヲ得但シ繼父母嫡母又ハ後見人カ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲スハ戸主カ疾病其他參事由其因ミ其権利ヲ行フ事と能ベテ應カキハ戸主ノ親族會

ル由主ニ代リテ離婚ヲ爲スヨドア得但シ由主ニ對シテ親權ヲ行フ者又後見人アルトキハ此限ニ在ラス(民法第七五一條)

(二) 民法ハ離籍ノ意思表示ニ付テノ方式ヲ規定セス然レトモ戸籍法第百四十

八條ニハ「戸主ガ其家族ヲ離婚セハト欲スルトキハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ届出

ヲ要スル特許規定シナム大體シ簡便セントラル者ニ届出シ係リテ其意在ヲ表示スルコトヲ要シ戸籍吏カ此届出ヲ受理シタルトキハ離籍ノ效力ヲ生ス

ト爲ナナルヘカラヌ又之を発せ體験人曰日本一車内に黙黙モ教ハ口不發身起體
誰者ハ左ノ歎力ヲ生ス同意モ滑太刀モ體験マ然必死入る事ニ體味實踐モ未セリ

第一回 離籍セラレタル者ハ其家ノ家族タル身分ヲ失ヒ其家ヲ去ル

第二手離籍セラントル者ハ一家ヲ創立ス(民法第七四二條) 其者其ノ創立シタル家ノ戸主ト爲ルヘ可也

第三、夫カ離籍セラレタルトキハ妻ハ之ニ隨ヒテ其創立シタル家ニ八ル(民)

法第七四五條　主に遺産又は大抵の財物を被相続人に残す民法上
第四回 家族が養子ヲ爲シタル爲メ離籍セラレタルトキ(前一)ノ第二ハ其養子

卷之三

八義親ニ隨ヒテ其創立シタル家ニ入ル(民法第七五〇條第三項)又ヨ其餘イ

(三) 戸主カ其家族ヲ離籍セント候スルトキニ左ノ記載リ其もテ之ノ届出ハ
コドヲ要ス(第一四八條)
此日以前一ノ様ニ都ニ改稱本ニシテ開籍入居

一 離籍セラルヘキ者ノ氏名、出生ノ年月日及ヒ職業

二、簡易ノ原因(前)一ノ第一及ヒ第二を参照。主原因等三ノ全ノ
三、離籍セラルヘキ者ト共ニ家ヲ去ルヘキ者(前二)ノ第三及セ第四參照アル

トキハ其名出生ノ年月日職業及ヒ其者ト離婚セラルベキ者トシ離柄異合
見合ノ行ニ告又、後見ニタヨリテ誰者ヲ爲ナントシトシトキハ其者

在リテハ居書ニ其同憲ノ證書ヲ添フルヲ相當トス
見矣會々吉生ニア誰當不爲ナントストキハ其國族會ノ會員ノ過半數民

法第九四七條より前(三)ノ届出ヲ爲スコトヲ要ス。國本ノ處所、氏名、出生ノ年月日、職業本籍地及ニテ曰主二代ヲテ
以上ノ易合ニ正リテハ右主ノ氏名出生ノ年月日職業本籍地及ニテ曰主二代ヲテ

(注)注意 戸籍法ニ以テ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲ス場合ノ届出ニ關スル特別ノ規定
以テ缺クカ故モ戸主ニ限ミ離籍ノ届出人ト爲シ不得本籍者アリ然レバモ同
法第百四十八條ハ戸主タリ届出ヲ爲ス場合モノミ開スル規定ニアラスシテ戸
主又ハ之ニ代ル者カ戸主權ヲ行使シテ離籍ヲ爲ス場合モノミ開スアリ届出
ノ規定ナリト解スルヲ正シトス

(五)離籍ニ因リテ一家ヲ創立シタル者ハ其事實ヲ知リタ所日ヨリ十日内ニ左
諸件ヲ具シテ其旨ヲ届出メルコトヲ要ス(第一四九條セシムテ)其旨
一、離籍ヲ爲シタル戸主ノ氏名出生ノ年月日職業及ヒ本籍地イ前(四)希場合
二ニ在リテハ戸主及ヒ戸主ニ代リテ離籍ヲ爲シタル者ニ氏名等ヲ記載スル
ヲ要スヘシ(前二項)又テ様ニ様ニ其原因並其事由を記載スル
二、離籍ヲ爲シタル戸主トノ届出人トノ様柄又コト解ス
(三)離籍ノ原因及ヒ年月日(前一)ノ第一及ヒ第二ヲ参照スヘシ離籍ノ年月
日トハ戸籍吏カ離籍ノ届出ヲ受理シタゞ年月日ヲ指スミテソシテ記出ス
四、届出人ノ家ニ入ルヘキ者アルトキハ其名出生ノ年月日職業及ヒ其者ト

居出人トノ續柄(前二)ノ第三及ヒ第四ヲ参照スヘシ離籍ノ年月日

(六)離籍ノ届出ハ離籍ノ效力ヲ生セシムル爲メニ爲ス届出ニシテ離籍ニ因ル
一家創立ノ届出ハ既ニ發生シタル事實ニ付キ戸籍法上ニ義務トメアリ爲ス届出
ナリ故ニ離籍ニ因ル一家創立ノ届出ニ關シテハ戸籍法第四十六條ヲ適用スヘ
キモ離籍ノ届出ニ關シテハ同條ヲ適用スヘキ限ニ在ラス

(第四)離籍拒絶ノ届出(前二)ノ第三及ヒ第四ヲ参照スヘシ離籍ノ年月日

(一)左ノ場合ニ於テハ戸主ハ其家族タリシ者ノ復籍ヲ拒絶スルコトヲ得
真第一種家族カ戸主ノ同意ヲ得シテ婚姻又ハ養子縁組アリテ他
家ニ入りタルトキハ戸主ハ其婚姻又ハ養子縁組ノ日ヨリ一年内ニ復籍ヲ拒
絶スルコトヲ得民法第七五〇條第二項
真第二種婚姻又ハ養子縁組アリテ他家ニ入りタルトキ
得スル者更ニ婚姻又ハ養子縁組アリテ他家ニ入りタルト
キハ實家ノ戸主ハ其婚姻又ハ養子縁組ノ日ヨリ一年内ニ復籍ヲ拒絶スルコ
トヲ得民法第七四一條ヘシテ此種様子外特ハ無ニテ(イ)ニ

- 戸主カ無能力者ナムトキ又ハ其權利ヲ行フ能ハナルトキニ關シ前(第三)ノ(一)ニ述ヘタル所ハ復籍拒絶ニ付テモ亦同シ
 (二) 戸籍法第百五十條ニ「戸主カ其家族タリシ若復籍ヲ拒セント欲スルトキハ(中略)アシタル所ハ復籍拒絶ノ意思ニ付セント」規定シアルカ故ニ復籍拒絶ノ意思ニ付セント欲スルトキハヲ表示スルヲ要シ戸籍吏タ此届出ヲ受理シタルトキハ復籍拒絶ノ意思ニ依スト爲ナナルヘカラス
 (三) 戸主カ其家族タリシ者ノ復籍ヲ拒マント欲スルトキハ左ノ諸件ヲ具シテ復籍ヲ拒絶セラレタル者ハ離婚又ハ養子縁組ノ場合ニ於テ拒絶者ノ家ニ復籍スルコトヲ得ス
 (四) 戸主カ其家族タリシ者ノ氏名、出生ノ年月日、職業及ヒ本籍地道マ頃根又ヘ
 (五) 戸主カ其家族タリシ者カ婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ入リタル家ノ家族ナルトキハ其家ノ戸主ノ氏名、出生ノ年月日職業及ヒ本籍地道マ頃根ニ付シ
 三 復籍拒絶ノ原因前(一)ノ第一又ハ第二)及ヒ其原因發生ノ年月日

- (一) 戸籍法第百三十條ヘタル所ハ復籍拒絶ノ届出ニ付テモ亦同シ
 (二) 前(三)ニ述ヘタル届出ハ復籍拒絶ノ效力ヲ生セシムル爲メニ爲ス
 (三) 届出ノ時日
 (四) 戸籍法第四十六條ノ適用ヲ受クヘキ限ニ在ラズ
 (五) 戸籍拒絶又ハ復籍スヘキ家ノ廢絶ニ因ル一家創立ノ届出
 (一) 婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ他家ニ入リタル者ハ離婚又ハ離縁ノ場合ニ於テ實家ニ復籍スルヲ原則トス民法第七三九條然レドモ實家ニ復籍スルコト能ハナルトキアリ左ノ如シ
 第一 實家カ廢絶シタルトキハ其者ナムヘ其否出紙ハ平日無事又ヨ其否イ
 第二 實家ノ戸主カ復籍ヲ拒絶前第四委託シタルトキ
 右第一及ヒ第二ノ場合ニ在リテハ其者ハ一家ヲ創立ス但シ第一ノ場合ニ在リテハ其者ハ廢絶シタル實家ヲ再興スルコトヲ妨ケス(民法第七四〇條第七四二條)
 (一) ノ場合ニ於テ一家ヲ創立シタル者ニ妻アクトキハ其妻ハ之ニ隨ヒ夫其創立シタル家ニ入ル(民法第七四五條)ニ因リモ夫婦又ヒ夫婦ヘモ收養ス

(三) 塵復籍拒絶又ハ復籍スルキ家の廢絶ニ因リテ復籍ヲ爲スコト能ハサル者カ
一家ノ創立シタルモキハ其事實ヲ知メタ時日三十日内ニ左ノ諸件ヲ具シテ
其旨ヲ届出ツルコトヲ要ス第一五一條。

(四) 其復籍ヲ拒ミタル月主又ハ廢絶シタル家ノ最終ノ月主ノ民名出生ノ年月
吉日、職業及工本籍地ニ至シテ其旨ヘ一筆モ附立スル事一、其旨ニ通じ
二、復籍拒絶又ハ復籍スルキ家の廢絶ノ原因及ト年月日

三、届出人ノ家ニ入ルヘキ者アルトキハ其名出生ノ年月日、職業及ヒ其者ト
ヘモ届出人トノ縫添前(二)ア参照スヘシ

戸籍法ニハ一家創立ノ年月日ヲモ記載スルコトヲ要ストノ明文ナシ然ヒトモ
復籍拒絶又ハ復籍スルキ家の廢絶ノ年月日モ一家創立ノ年月日ト異ナムカ故
ニ届出書ニ一家創立ノ年月日ヲモ記載スルヲ相當トス既立、既出

(五) (注) 一一家創立ノ年月日、復籍ヲ拒絶シラレ又ハ實家カ廢絶シタル後離婚
又ハ離縁アリタル年月日カ既出せば既出者モ其者ハ既出セバ既出者モ既出セバ
既出者(三)ノ届出ハ既テ發生既存ノ事實ノ届出ナビカ故ニ戸籍法第四十六條ノ

適用ヲ受ク参考書ハ月主ニ外メテ其家ニ在リスル者ハイオノ書入

(注) 本節ニ掲タル各種ノ事由ニ因ル一家創立絶家ニ因ル一家創立後ノ

第十七節參照及セ出生ノ際又ハ母ノ家ニ入ルコト能ハサルニ因ル一家創

立民法第七三三條第三項、第七三五條第三項、本人ノ意思ニ基クニアラス此

等ノ事由發生シタル場合ニ於テ法律ノ規定ニ依リ當然一家ヲ創立スルモノ
トス此點ニ於テ分家又ハ廢絶家再興ト異ナシヘバ過度ノ大ハヨリモ過度者

過度者

第十七節 廢家、絶家及ヒ絶家ニ因ル一家創立ニ關スル届出

(第一) 総論該家ニ再興スルハ跡ノヨリ既出者百六十二件第一項ニ領解述

(一) 本節ニ於テハ戸籍法第四章第十七節ノ規定ニ説明スヘシ求ム然スルハ

戸籍法第十七節ニゲ度家、絶家及ヒ絶家ニ因ル一家創立ノ届出ノ規定シ

(二) 本節ニ掲タル届出ハ前節ニ掲タル届出ト同シク家ニスミ開スル届出ナ

(前節第二八(二)参照)

戸籍法・身分登記・身分二種類の問題

第二) 廉家人届出

(一) 新ニ家ヲ立テタル者取扱業者相続ニ因ル不動産戸主ト爲リ者ハ其家ヲ廣シテ他家ニ入ルコトヲ得民法第七六二條第一項

(注意) 前節及ヒ本節ニ掲タル事由ニ因リ無家ヲ創立セタル者出生ノ慶祝又

(一) ハ母ノ家ニ入ルコト能ハサヨシ爲メ一家ヲ創立シタル者分家ヲ爲シタル者若クハ廉絶家ヲ再興シタル者ハ孰レモ民法第七百六十二條第一項ニ所謂新

ニ家ヲ立テタル者ナリ

家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ本家の相続又ハ再興其他正當之事由ニ因リ裁判所ノ許可ヲ得タルトキ無限リ其家ヲ廣シテ他家ニ入ルコトヲ得民法第七六二條第二項非訟事件手續法第九一條

(二) 廉家トハ戸主ガ自己ノ意思ニ基キ其家ヲ廣スルヲ謂クニ基ニテ大戸戸主權家ナ戸主權ヲ行使ニアラズ故ニ戸主ニ對シ親權ヲ行フ者後見人又ハ親族會

カ戸主ニ代リテ其權利ヲ行フ場合民法第八九五條第九三四條第一項第七五一

條ト雖モ此等ノ者ハ戸主ニ代リテ其家ヲ廣スルコトヲ得ス

(注意) 戸主權トハ家族又ハ家族外チ者ニ對スル戸主ノ權利ナゾ然ルニ親權ヲ行フ者後見人親族會ハ戸主ニ代リテ戸主權ヲ行フ權限ヲ有スルニ止マ

ルカ故ニ戸主ニ代リテ廉家ヲ爲スヲ得ナルナ(此事ハ民法第九百三十四條第一項ノ趣旨ヨリ見ルモ明カナリ)前項並ヘ前項並ヘ

(三) 民法ニハ廉家ノ意思表示ニ關スル方式ヲ規定セヅルモ戸籍法第百五十二

條三廢家ヲ爲シト欲スル者ハ(中略)之ヲ届出フルコトヲ要スト規定シアルカ故ニ廉家ノ意思ハ届出ニ依リテ表示スルノ固リ要ジ戸籍吏カ此届出ヲ受理スルトキハ廉家ノ效力ヲ生スルト爲ナサルヘカラズ但シ申告日數ヲ過期スル

(注意) 裁判所ノ許可ヲ得テ廉家ヲ爲ス場合ニ在リテハ許可ニ因ル廉家ノ效

力ヲ生スルニアラズ許可ヲ得テ爲シタル届出ヲ戸籍吏カ受理スルニ因リ其

效力ヲ生スルモノトス但シ申告日數ヲ過期スル

(四) 戸主ハ前(一)ノ要件ヲ具備スルトキハ其家ヲ廣シテ他家ニ入ルコトヲ得ムモ單ニ其家ヲ廣スルコトヲ得ス故ニ廉家ハ婚姻入籍本家相續其他ノ事由ニ因リ時ニ他ノ家ニ入ルコトヲ得ム場合ニ限り之ヲ爲スニ因リ得ムモ其家ス人

戸主カ適法ニ廢家シテ他家ニ入ル時等ハ其家族モ亦之ニ隨ヒテ於當然其家ニ入
メ民法第七六三條^(イ)ノ所載者又は廢家シタル者ノ許可ニ關スル裁判ノ際本ヲ添ヘテ之
(五) 廢家ヲ爲シント欲スル者カ左ノ諸件ノ具シ家督相續ニ因ルト戸主氏爲リ
タル者ニ非ナルコトノ證明書又ハ廢家ノ許可ニ關スル裁判ノ際本ヲ添ヘテ之
ヲ届出ツルコトヲ要ス(第一五二條)
一方廢家シタル者カ入ルヘキ家ノ戸主ノ氏名出生入年月日職業及ヒ本籍地
ニ二子廢家シタル者ニ隨ヒテ他家ニ入ル者ノ名出生ノ年月日及ヒ職業
戸籍法ニハ明文ナキモ廢家シタル者ト之ニ隨ヒテ他家ニ入ル者トノ相續柄ヲモ
届書ニ記載スルヲ相當トス^(ウ)管轄区域外に在リテ其届出モ要ス^(エ)此
(六) 廢家ノ届出ハ既ニ發生シタル事業ニ關シ戸籍法上ノ義務トシア爲スヘキ
届出ニアラサルカ故ニ戸籍法第四十六條ノ適用ヲ受クヘキ限ニ在ラス
(七) ^(前四)ニ述ヘタル如ク他家ニ入ルヲ得ルトキニ限リ廢家ヲ爲シコトヲ得ル
モノナルカ故ニ婚姻義子縁組入籍廢家再興ノ如キ届出ニ依リ效力ヲ生スル
事由ニ因リ他家ニ入ルヘキ場合ニ在リテハ其届出ト廢家ノ届出トア同時ニ爲
宗ノ届出トヲ同時ニ爲スコトヲ要セス^(オ)

ササルベカラス^(カ)此處未だ此種者未だ有リ未だ此種者未だ有リ
然シモ本家相續ノ如キ届出ニ依ラスノ效力ヲ生スル事由ニ因リ他家ニ入
ルヘキ場合ニ在リテハ其事由ニ關スル届出例ヘハ本家の家督相續ノ届出ト廢
家ノ届出トヲ同時ニ爲スコトヲ要セス^(カ)

(第三) 絶家及ヒ絶家ニ因ル一家創立ノ届出ニ更ニ及ハ理由又開示、申出
(一) 戸主ヲ失ヒタル家ニ家督相續人ナキトキハ絶家シタルモノトシ其家族
各一家ヲ創立ス但シ子ハ父ニ隨ヒ又父カ知レサムトキ他家無在ルトキ若クハ
死亡シタルトキハ母ニ隨ヒテ其創立シタル家ニ入り妻ハ夫ニ隨ヒテ其創立シ
タル家ニ入ル(民法第七六四條^(イ)ノ所載者又は此事實ニ就キ安め日^(ウ)三十日内
(注意) (イ) 家督相續開始ノ當時家督相續人ナキトキト雖モ之ヲ以テ直ニニ
絶家シタルモノト爲スコトヲ得ス何トナレハ家督相續開始シタル然後前戸主
ノ親族會カ家督相續人ヲ選定スルカ如キコトアレハナル人也或速大^(ウ)
(ロ) 法院指定又ハ選定ノ家督相續人アルコト分明ナラム爲ス裁判所カ民
法第千五十八條非訛事件手續法第六十五條、第七十條、第七十七條ノ規定ニ依

(二)旨ヲ公告シ期間満了シタルモ家督相續人顯ハレナムトキハ絶家シタルモノ
ト確定ス(隨テ此期間満了後ハ前月主ノ親族會ハ家督相續人ヲ選定スルコト
ヲ得ス)但シ絶家ノ年月日ハ此期間満了ノ日ニアラスシテ家督相續之開始ア
リタル日ナリ又其地主相続人等御子等はモナシトニ總ニ於て列シ
絶家ノ家族ニシテ一家ヲ創立シタル者ハ其事實ヲ知リタル日ヨリ十日内
ニ左ノ諸件ヲ具シテ絶家及ヒ一家創立ノ届出ヲ爲スヨリテ要フ(第一五三條)
一家絶家ノ最終ノ月主ノ氏名出生ノ年月日職業及ヒ本籍地等ナシテ
之日ニ付テハ前(一)ノ注意ヨロシ(未段ヲ参照スヘシ)
三一家ヲ創立シタル者ニ隨ヒテ其家ニ入ル者ノ名出生ノ年月日及ヒ職業
戸籍法ニハ明文ナキモ一家ヲ創立シタル者ト之ニ隨ヒテ其家ニ入ル者トノ續
柄ヲノ居書ニ記載スルヲ相當トス

第十八節 分家及ヒ廢絶家再興ニ關スル屆出

籍吏が此届出ヲ受理シタルトキ其分家の效力ヲ生スト爲サルヘガラズ。且分家ヲ爲シタル者ハ其分家の戸主ト爲シタル者ハ中間改モ賦役又モセキ要分家ヲ爲シタル者ニ妻アリトキ其妻ハ之ニ隨ヒテ分家ニ入ル(民法第七四五條)。妻既ヘ民主、同意ヘシ小女ヘ養育ニ致スルモノリ。母子分離未だ准許ハ難能。又(注意)分家ヲ爲シタル者ノ直系卑属ノ如キハ之ニ隨ヒテ當然分家ニ入ルヘ出キ限ニ在ラス。

(二) 分家ヲ爲サント欲スル者ハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ届出ヅルコトヲ要ス(第十五四條)。事務十八道の猶御べ。

(一) 一本分家の戸主ト爲シキ者該氏名出生ノ年月日職業及ヒ本籍地ハ提出。

(二) 本家の戸主ノ氏名職業本籍地及ヒ其戸主ト分家の戸主ト爲シキ者トノ續柄。

三 分家の家族ト爲シキ者アルトキハ其名出生ノ年月日及ヒ職業。

四 分家の戸主及ヒ家族ト爲シキ者ノ父母ノ氏名職業及ヒ本籍地。

戸籍法ニハ明文ナキモ分家の戸主ト爲シキ者トは人續柄。

ヲモ届書ニ記載スルヲ相當トス。

(第三) 廉絶家再興ノ届出。次々容ニハ賛同本來不取締者等を除く。

(一) 左ノ場合ニ限リ。廉家又ハ絶家ヲ再興スルコトヲ得。

第一 家族ハ戸主ノ同意アルトキハ廉絶シタル本家の分家同家其他親族ノ家

スヲ再興スルコトヲ得但シ未成年者ハ親權ヲ行フ者若クハ母又ハ後見人ノ同

(二) 意ヲ得ルコトヲ要ス(民法第七四三條)。當書ニ記載セキモ可也。

(注意) 同家トハ本家ヲ同シクスル他ノ分家ヲ謂フ。

第二 婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ他家ニ入シタル者カ離婚又ハ離縁ノ場合

ニ於テ實家ノ廉絶ニ因リテ實家ニ復籍スルコト能ハサルトキハ其廉絶シタ

れど実家ヲ再興スルコトヲ得民法第七四〇條但書(參照)。

(注意) 協議上ノ離婚若クハ離縁ノ場合ニ在リテハ其届出ト同時ニ又裁判上
ノ離婚若クハ離縁ノ場合ニ在リテハ判決ノ確定ト同時ニ廉絶家再興ノ届出
ヲ爲スミアラサレハ民法第七百四十條ノ規定ニ依リ。一家ヲ創立スレバシテ
家ヲ創立シタル後ハ其家ヲ廢スルニアラサレハ廉絶シタル實家ヲ再興スル

(二) 廉絶家ヲ再興シタル者ハ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ届出フルコトヲ要ス第一五五條ニイテ機中火薬内が害の疊起ニ付て皆悉くハ根元火薬長火薬同様に其頭部を火薬絶家ヲ再興シタル者ニ妻アリトキハ其妻ハ之ニ隨ヒテ再興シタル家ニ入ル民法第七四五條

（一）二事廉絶ノ原因及ヒ年月日廉絶を再興火薬ニ付シタル者

三 廉絶シタル家ト再興ヲ爲ス者ノ家トノ縁柄 實家、本家、分家、同家等ノ縁柄

炳ヲ記載スルヲ謂不當也

(二) 唐磨絶家ヲ再興セント欲スル者ニ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ届出ツルコトヲ要ス
第一五五條 二十一年十一月廿日、北内所御、縣主を督て書懸み、其父又ハ其良人又ハ同
一、唐磨絶家ノ最終ノ戸主ノ氏名職業及ヒ本籍地、本家名、家臣名、其耕種地、入籍
二、唐磨絶ノ原因及ヒ年月日、再興之年月日等を記載スルヲ謂フ。

卷之三

四 再與ヲ爲ス者ノ戸主ノ氏名出生ノ年月日職業及ヒ本籍地
五 再與ヲ爲ス者ニ隨ヒテ其家ニ入ルベキ者ノ名出生ノ年月日及ヒ職業

月籍法ニハ明文ナキモ再興ヲ爲ス者ト之ニ隨ヒテ其家ニ入ルヘキ者トノ續柄者トノ再興スル場合(前一ノ第一参照)ニアリテハ再興スル

者ト廢絶家ノ最終ノ戸主トノ親族關係ヲモ居書ニ記載スルヲ相當トス
(第四) 通則 申入人及日本人を兼て日本國國民並御子孫ヲ日本人士及國人

(一) 分家ノ届出人又ハ前第三ノ(一)ノ第一ノ場合ニ於ケル廢絶再興ノ届出人
ハ届書ニ月主ノ同意ノ證書ヲ添ヘ又ハ戸主ヲシテ届書ニ同意ノ旨ヲ附記シ之

ニ署名捺印セシムルコトヲ要ス(第一五六條第一項)
分家ヲ爲ス者又ハ前(第三)ノ一ノ場合ニ於テ廢絶家ヲ再興スル者カ未成

(二) 分家又ハ廢絶家再興ニ届出バ既ニ效力ヲ生シタル事實ニ關スル届出ニアラルカ故ニ戸籍法第四十六條ノ適用ヲ受ケス

(注意) 分家ヲ爲シタル者ハ本家ノ氏ヲ稱ス

廢絶家ヲ再興シタル者ハ其廢絶シタル家ノ氏ヲ稱ス。建實ニ關スル事例
其他ノ事由ニ因リ新ニ家ヲ立シタル者ハ任意ニ氏ヲ選フコトヲ得ト信ス但
争レ異説アリ。居間等要點く往々考文の餘民人、商道、病苦等之類に於
(一) 外國人カ日本人ノ妻入夫又ハ養子ト爲リタルトキハ日本ノ國籍ヲ取得ス
ルモノ下ス(國籍法第五條)。且^テ外國人妻入夫ハ半日^テ日本業者ヨリ本籍取
得シテ外國人妻入夫ハ日本ノ國籍ヲ得シテ外國人妻入夫ハ日本ノ國籍ヲ得シテ
本節並於ラハ日本ノ國籍ノ得喪ニ關スル届出ノ手續(月籍法第四章第十九節)ヲ
説明スヘシ。外國人カ日本人ト爲ルヲ日本ノ國籍ノ取得ト謂ヒ。日本人カ外國人
ト爲ルヲ日本ノ國籍ハ喪失ト謂ヒ。關スル事例ハ以下詳述ス。

(第一) 總論(主に開墾、通商、通航又ハ貿易による開拓者、開港場、貿易場等を指す)

本節並於ラハ日本ノ國籍ノ得喪ニ關スル届出ノ手續(月籍法第六十六號國籍法ヲ參照スヘシ)矣。

(第二) 外國人カ婚姻又ハ養子縁組ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得スヘキトキハ(月籍法第十九節)

(一) 外國人カ日本人ノ妻入夫又ハ養子ト爲リタルトキハ日本ノ國籍ヲ取得ス
ルモノ下ス(國籍法第五條)。且^テ外國人妻入夫ハ半日^テ日本業者ヨリ本籍取
得シテ外國人妻入夫ハ日本ノ國籍ヲ得シテ外國人妻入夫ハ日本ノ國籍ヲ得シテ
本節並於ラハ日本ノ國籍ノ得喪ニ關スル届出ノ手續(月籍法第四章第十九節)ヲ
説明スヘシ。外國人妻入夫又ハ養子縁組ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得スヘキトキハ(月籍法第十九節)

(二) 外國人カ認知ニ因リテ日本ノ國籍ヲ取得スヘキトキハ認知者ハ私生子認

知ノ居書ニ子ノ原國籍ヲ記載スルモノトキ要シ子ノ母カ外國人ナルトキハ母ノ

國籍ヲ記載スルコトヲ要ス(第一五八條)

合ニ限ル。

二六一

戸籍法 南分類記 庫分ニ關スル所略

(第四) 踏化

(一) 外國人ハ國籍法第七條以下ニ規定シタル條件ヲ具備スルトキハ内務大臣ノ許可ヲ得テ歸化ヲ爲スコトヲ得歸化ヲ爲シタル者ハ國籍法第五條ニ依リ日本ノ國籍ヲ取得ス

歸化ヲ爲シタル者ニ妻又ハ本國法ニ依リテ未成年者タル子アルトキヘ此等ノ者モ其ニ日本ノ國籍ヲ取得ス但シ例外ノ場合ナキニアラス尙ホ此事ニ付テハシ
國籍法第十三條第十五條ヲ參照スヘシ

(二) 踏化ヲ爲シタル者ハ踏化ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ十日内ニ左ノ諸件ヲ具
シ内務大臣ノ許可書ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ届出フルコトヲ要ス

一 開化人ノ氏名出生ノ年月日職業住所及ヒ原國籍
二 父母ノ氏名出生ノ年月日、職業及ヒ國籍並豫定候補、是擇候ミ思惟候ル
三 脱化人ト共ニ日本ノ國籍ヲ取得シタル者アルトキハ其名、出生ノ年月日

職業及ヒ其者ト歸化人トノ續柄がん遂モ入矣始羅一通

卷之三

卷之三

歸化人ノ妻又ハ子カ歸化人ト共ニ日本ノ國籍ヲ取得セザルトキハ屆書ニ其事由ヲ記載スルコトヲ要(以上第一五九條)

發生シタル事項ニ關シ戸籍法上ノ義務トシヲ爲ス届出ナリ

(一) 日本人ハ國籍法第十八條乃至第二十四條ニ掲ケタル事由アルトキ例へテ日本ノ女カ外國人ト婚姻ヲ爲シタノトキノ如シハ日本ノ國籍ヲ喪失ス

(二) 日本の國籍ヲ失フヘキ者、其國領外前之左ノ謂テ、其シテ之ヲ居留ツ

二、國籍ヲ喪失スヘキ期日ヲ豫メ知り得ヘキトキハ其年月日、國籍喪失ノ正原因カ發生スヘキ日ヲ謂フ例ハ日本ノ女ガ外國人ト婚姻ヲ爲サントス

三四 法定ノ推定家督相繼人アルトキハ其名出生ノ年月日、職業及ヒ其者ト届

三 出人上ノ繪柄深君等難人ハササギササギ其餘出人ハササギ學員日經業風ハササギ其餘イ御
四 新ニ取得スハササギ國籍ハササギ發セハササギ又ハ半員日ハササギ出人
五 届出人ノ妻又ハ子カ共ニ國籍ヲ失フハササギトハ其妻又ハ子ノ名出生ノ年
二月日及ヒ職業國籍法第二一條參照 ハササギハ子ノ名生ハササギ其學員日ハササギ國籍喪失ハササギ
(三) 一日本ノ國籍ヲ失ヒタル者カ國籍喪失前ニ前(二)ノ届出ヲ爲スコト能ハサリ
シトキハ國籍喪失後十日内ニ之ヲ爲スコトヲ得ス但シ國籍喪失者カ日本ニ住
所アモ居所アモ有セサルトキハ此限ニ在ラス第一六一條

(四) 日本ノ國籍ヲ失フハササギ者カ滿十七年以上ノ男子ナルトキハ國籍喪失ノ届
出人ハ届書ニ其者カ既ニ陸海軍ノ現役ニ服シタルコト又ハ之ニ服スル義務ナ
キコトノ證明書ヲ添フルコトヲ要ス
日本ノ國籍ヲ失フハササギ者カ官職ヲ帶フル者ナルトキハ國籍喪失ノ届出人ハ届
書ニ所屬長官ノ許可書ヲ添フルコトヲ要ス以上第一六二條

注意

戸籍法ニ第一百六十二條ノ規定ヲ設ケタルハ國籍法第二十四條ノ規定

由アルカ於テハ子或孫人共ニ日本ノ國籍ヲ領持セシムシテム届書ニ其事

明治三十四年八月一日印刷

明治三十四年八月五日發行

東京市四谷區四谷仲町三丁目三十八番地

發行者

小田幹治郎

印刷者

金子鐵五郎



東京市芝區西久保明舟町十一番地

發行所 司法省 指定 和佛法律學校

(電話番町百七十四番)

明治二十二年十二月九日內務省許可